2014 年 2 月 28 日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長　金 東瀅 様

関西大学図書館　加藤 博之
中村学園大学図書館　今藤　　覚
明治大学図書館　矢野 恵子
（大学 50 音順、3 大学 3 名）

2013 年度　海外集合研修報告

2013 年 11 月 25 日（月）より 11 月 30 日（土）まで、2013 年度海外集合研修に参加いたしましたので、別紙のとおりご報告いたします。

2013 年度私立大学図書館協会海外集合研修報告書

I. 概要

1. テーマ：「デジタルアーカイブ運用の実際を学ぶ」

環太平洋デジタル図書館連合（PRDLA Pacific Rim Digital Library Alliance ）の創設メンバーである香港大学において『蔵書のデジタル化の実際』とそれを公開するための『著作権処理』、学術図書館間における『ネットワーク形成の実際』を学ぶ。

2. 訪問機関

(1) 香港大学 University of Hong Kong (HKU)
大学 URL http://www.hku.hk/
図書館 URL http://lib.hku.hk/
(2) 香港科技大学 Hong Kong University of Science and Technology (HKUST)
大学 URL http://www.ust.hk/eng/index.htm
図書館 URL http://library.ust.hk/
(3) 香港城市大学 City University of Hong Kong (CityU)
大学 URL http://www.cityu.edu.hk/
図書館 URL http://www.cityu.edu.hk/lib/
(4) 香港中文大学 Chinese University of Hong Kong (CUHK)
大学 URL http://www.cuhk.edu.hk/english/index.html
図書館 URL http://www.lib.cuhk.edu.hk/
(5) 香港中央図書館 Hong Kong Central Library
図書館 URL http://www.hkpl.gov.hk/hkcl/eng/home/index.html

3. 日程

日付	時間	研修内容
11/25（月）	PM	香港国際空港着
	16:00 – 17:30	香港大学にてオリエンテーション（メインライブラリーおよびキャンパスツアー、ウェルカムレセプション）
11/26（火）	9:00 – 9:30	【講義】Introduction to HKU Libraries
	9:30 – 10:00	香港大学図書館特殊コレクション見学
	10:00 – 11:00	【講義】HKU Scholars Hub ①
	11:30 – 12:30	【講義】HKU Scholars Hub ②
	14:00 – 14:30	【講義】Cataloguing

日付	時間	研修内容
	14:30 – 15:30	【講義】Copyrights in HK
	16:00 – 17:00	【講義】Digitization at HKU Libraries ①
	17:00 – 17:30	香港大学センテニアルキャンパス見学
11/27(水)	9:30 – 11:45	香港科技大学見学
	13:30 – 16:30	香港城市大学見学
11/28（木）	9:30 – 11:00	【講義】Digitization at HKU Libraries ②
	11:30 – 12:30	【講義】Networking and collaborations
	13:30 – 14:00	香港大学馮平山図書館（中国貴重書室）見学
	14:00 – 16:00	【講義】Digitization at HKU Libraries - System
	16:30 – 17:00	香港大学医学図書館見学
11/29（金）	10:15 - 11:45	香港中央図書館見学
	13:00 – 14:00	香港中文大学見学
	16:00 - 17:45	JULAC Forum 参加
11/30（土）	PM	香港国際空港発

II. 事前準備

1. 事前説明会

11 月 1 日（金）関西大学（千里山キャンパス）総合図書館において、事務局から研修日程や諸注意等の説明を受け、リーダー等各自の担当、手土産、訪問先への質問事項、関係者連絡先、研修後の予定など確認した。また、旅行会社 JTB より、今後の航空券手配等、旅行日程や現地での留意事項の説明を受けた。

2. 事前調査

・今回はレクチャーが 3 種と見学先が 5 図書館のため、報告書の執筆を 1 人レクチャー1 種と見学 2 図書館（1 人は 1 図書館） という分担とし、事前に Web 情報や参考文献により概要を調査し情報交換した。

・手土産については、各大学グッズの中から選定し、清算は現地で行うこととした。

・訪問先への質問事項については、香港大学への質問を 1 人 2 つ、その他の図書館への質問を 1 人 1 つ考えることとしてメールのやり取りを進め、最終的にまとめた事項を、事前に事務局を通して訪問先宛連絡した。

・JULAC Libraries Forum 2013 への参加については出発直前に決定したため、各自で概要を確認した。

III. 報告

1. 講義

(1) HKU Scholars Hub p.5

(2) Cataloguing p.6

(3) Copyrights in HK p.6

(4) Digitization at HKU Libraries p.7

(5) Networking and collaborations p.14

(6) JULAC Forum p.20

2. 訪問機関

(1) 香港大学 p.24

(2) 香港科技大学 p.29

(3) 香港城市大学 p.36

(4) 香港中文大学 p.41

(5) 香港中央図書館 p.47

III.　報告

今回の研修は大きく二つの形式で行われた。一つは香港大学図書館員によるテーマに基づく講義、もう一つは 5 つの図書館の見学および図書館員との交流である。以下、講義と見学に分けて、内容を報告する。

１．講義

(1)　HKU Scholars Hub

講師：Mr. David Palmer, Head, Technical Services

HKU Scholars Hub（http://hub.hku.hk/）は香港大学の機関リポジトリであり、出版物のオープンアクセス化を進めるため、2005 年にスタートした。しかし、当初は教員への浸透がなかなか進まず、リポジトリの登録数は多くはなかったそうである。一方、2009 年に香港大学は"Knowledge Exchange"という施策を打ち出し、大学の生み出す「知」を企業やあらゆる公共の場に還元することで社会に貢献し、また、大学も学外からの知識やサポートを得るといった、「知の交流」の促進に力を入れ始めた。そこで、図書館はこの Knowledge Exchange プログラムと Scholars Hub をうまく結びつけ、Scholars Hub を大学の生み出す知のデータベースとして大学全体のプログラムの一環として位置づけることで、リポジトリの登録を伸ばし、さらには Scholars Hub のシステムの促進を図った。

Scholars Hub は当初の、雑誌論文、学論論文、学習教材といった出版物を集め、公開する「機関リポジトリ(Institutional Repository=IR)」ことから、さらに広範囲の研究に関する情報（研究者、プロジェクト、組織、出版物を含めた研究成果物、特許、製品など）へのアクセスを可能にする「研究情報管理システム(Current Research Information System=CRIS)」へ発展した。大学の Knowledge Exchange プログラム事務局からも予算を得て、CINECA 社（イタリア）と共同で、Dspace を用いた CRIS を運営しているとのことである。

IR と比べて CRIS が優れている点は、CRIS は IR のように出版物のメタデータとその全文へのアクセスを提供するだけではなく、研究者、プロジェクト、受賞、特許、研究成果・効果など幅広い情報も持つことがあげられる。このことにより、より広範囲の研究情報を得ることができるほか、CRIS では研究者が自らの研究成果に関する様々な統計を抽出することができるなど、研究活動をサポートする機能がある。

Scholars Hub には香港大学の学位論文も登録されている。香港大学の最も古い学位論文は 1941 年のもので、もちろん紙媒体である。2001 年に博士論文のオンライン化が香港大学で義務付けられ、これ以降の学位論文は全て Scholars Hub に登録されることになった。過去の学位論文については、カーネギーメロン大学が主体となった"Million Book Project"を利用して 2005 年に大量の学位論文をデジタル化し、Scholars Hub に登録した。過去の学位論文公開の際は、著者宛に郵送およびメールで、「論文は原則オンラインで公開するが、公開停止希望という連絡があればそのようにする」という旨の通知を行い、これをもって許諾を得たとした（Palmer 氏の表現では"assumed permission"）ということであった。実

際に公開停止希望の連絡があったのは数件だったそうである。現在、香港大学の学位論文は全て Scholars Hub に登録されているが、学位論文はデジタル化資料の中でも非常に需要が高く（2008－2009 年には約 130 万件、2010－2011 年には約 240 万件のダウンロード数）、過去の学位論文の公開はやはり必要だったと感じていると Palmer 氏は語っていた。

日本でも博士論文のインターネット公表が義務化され、今後はリポジトリでの公開が進むことになる。しかし過去の博士論文の公開については、まだ国内の大学では取り扱い方法を模索しているところではないだろうか。国立国会図書館でも過去の博士論文をデジタル化しているが、インターネット公開をしているのは著者の許諾を得られたものだけであり、その数は非常に少ないと聞いている。香港大学では assumed permission という考え方で過去の学位論文のリポジトリ登録・公開に踏み切ったとのことで、その大胆な方針には正直驚いた。しかし Palmer 氏にしてみればこのような日本の状況の方が問題と映るのかもしれない。確かに許諾のとれたものしか公開しない、という方針では過去の博士論文がまとまって公開されることはほぼあり得ないであろう。日本でも今後何らかの大胆なガイドラインが必要になるのかもしれない。

Scholars Hub、Knowledge Exchange、そしてこの後の資料のデジタル化の話を聞いていて、香港大学図書館が大学の持つ「知」を広く公開することで、世界中の研究者の支援と社会貢献をするのだという意識の高さを感じた。日本の大学図書館では最近特に学習支援が注目され、どの図書館でもこの点に力を入れているが、大学や図書館の持つ「知」や情報の公開、提供という使命も忘れてはいけないと再認識した。

(2)　Cataloguing

講師：Ms. Connie Lam, Cataloguing Librarian, Western & E-Resources

「目録(Cataloguing)」部門はテクニカルサービス部門の下にあり（その他同部門の下にあるのは「資料購入(Acquisition)」と前述の「Scholars Hub」）、目録部門はさらに「西洋言語資料および電子資料チーム(Western & ER Team)」と「中日韓言語資料及び AV 資料チーム(CJK & AV Team)」に分かれている。目録部門のスタッフは、ライブラリアン 2 名と 26 名のサポートスタッフ（目録 18 名、ハブメタデータ管理 2 名、装備等担当 4 名）とのことである。電子ブック、電子ジャーナル、データベース等の目録は Western & ER Team が行っているが、全体の処理件数は図書が 4 万件に対し、電子資料が 9 万件ということで、電子資料の存在は日本とは比較にならないくらい大きいものであることが伺えた。登録する資料の数、種類は増える一方、そのような状況に対応できるスタッフの育成が追いついていかない、特殊言語や特別な資料形態の知識を持ったスタッフがいないといった問題や悩みを抱えているとのことで、これらは日本の大学図書館だけの問題ではないのだということを感じた。

(3)　Copyrights in HK

講師：Ms. Irene Shieh, Law Librarian

香港の著作権法はイギリスの法を基にして作られており、多くのコモンウェルスの国々と同様に、”Fair Dealing”の考え方を採用している。著作権法で保護される著作物は、文学作品、演劇作品、音楽作品、録音記録、フィルム、放送、ケーブル放送、出版物の製版であり、保護期間は著作者の没後または作品の公表後 50 年（出版物の製版は 25 年）である。教育、そして図書館に関係する部分の著作権法として、授業で使用するための印刷物の複写、政府刊行物、コースパック（学生が授業前に読むように指示される、様々な文献の複写物を集めたもの）について、以下講義の内容を紹介する。

非営利目的の教育機関での印刷著作物の複写については、香港政府がガイドラインを定め、大学等での複写はこのガイドラインに従って行われているとのことである（”Guidelines for Photocopying of Printed Works by Not-for-profit Educational Establishments” http://www.ipd.gov.hk/eng/iplaws/guide_photocopy/guide_photo.pdf）。授業に必要な資料を複写する場合、決められた複写範囲の分量や部数などの条件があり、多くは日本でも似たようなものがある。少し変わった条件で、”3-day rule”というものがある。これは、授業で著作物を使うという決断をその授業の 3 日前以内に行った場合に複写ができるというものである。それ以上前に授業で使うと決めていれば、そのための許諾を得る時間があるとみなされるというのである。この条件については、Shieh 氏もあまり現実的ではないのではないか、と説明の際に苦笑していた。

政府刊行物はパブリックドメイン（著作権のない公有の情報）とはみなされず、香港政府が著作権保持者となっている。刊行物のみならず、条例(Ordinances)も政府が著作権を持ち、さらにはその期間も 125 年ということで、香港大学図書館のデジタル資料の一つに Historical Laws of Hong Kong Online（香港の条例集の画像データベース）があるが、このデータベース作成にあたり、香港の司法省の許諾を得る必要があったとのことである。

日本ではあまりコースパックの事例は見かけないが、香港大学ではアメリカなどの大学と同様ごく普通のシステムのようで、大学図書館がその製作と管理を行っている。大学は香港の複写権管理団体(Hong Kong Reprographic Rights Licensing Society)と協定を結び、一定の条件でのコースパックとしての著作物の利用が有料で認められている。

このような著作権関係の講義は日本の事例でも難しいものだが、慣れない香港のシステムをさらに英語で聞くというのは理解に非常に苦労をした。説明する Shieh 氏にとっても簡単ではなかったようで、「本当は法律の専門家に話をしてもらうのが良いテーマでしたね。私の説明で上手く伝わったでしょうか。」と最後におっしゃっていた。図書館員として働いている以上、必然的に著作権の問題とも深く関わることになり、実際に教職員から著作権に関する問い合わせもしばしば受ける。今回の研修ではもちろん香港の著作権法についての学びであったが、今後日本の著作権法、そして教育や図書館との関わりも再確認しなければならないと感じた。

(4) Digitization at HKU Libraries

講師：Dr. Y. C. Wan, Deputy University Librarian；Dr. K. M. Ku, Head, Technology Support Services

〈概要〉

香港大学図書館のデジタル化事業は、1995 年から開始している。デジタルアーカイブ白書 2005 によると、1995 年頃といえば、日本でもデジタル化事業の胎動期から推進期へ展開していった時期にあたり、94 年に京都大学と龍谷大学が、95 年に秋田県立図書館が事業を開始した頃である。

その後、現在までに 32 の多様なコンテンツが同図書館のウェブサイト（http://lib.hku.hk/database/）上で提供されている。コレクションの内容は、香港関係の内容が 24、法律関係が 3、その他となっており、23 のコレクションで全文検索が可能である。また、9 つのコレクションは外部機関（うち個人が 2）との協力により作成された。これらのコレクションの中には、貴重書や劣化の進んだ資料をデジタル化したというオーソドックスな内容のものから、香港大学の過去の定期試験をデジタル化したコレクションといったユニークなものが含まれている。

〈デジタル化の工程〉

講義では、同大学図書館のデジタル化の目的や対象資料の選考基準、フォーマットの使用等、具体的な内容を聴くことができた。ただし、研修のタイムテーブルの都合や、講義が複数の担当者で分担されたこともあって、必ずしも包括的・体系的な内容ではなかったので、本稿で報告する事柄も断片的な内容に留まる。

断片的な内容を、ある程度体系的に整理するために、本稿では「国立国会図書館　資料デジタル化の手引　2011 年版」(以下､「デジタル化の手引」)を参考にして報告を進めたい。なお、「デジタル化の手引」では、デジタル化の工程のうち、④画像データのサンプル作成および⑥画像データ等の作成は委託業者が行うものとされている。一方、香港大学図書館でも現在は工程を外部委託することが主流のようであったので、この点でも「デジタル化の手引」は都合がよい。「デジタル化の手引」では、原資料からのデジタル化の作製は、一般的に次の工程で行う、と記されているので、以下はこの順序で報告を進める。

① 対象資料の選定
② 対象資料の調査
③ デジタル化仕様書の作製
④ 画像データのサンプル作製
⑤ サンプルの検証
⑥ 画像データ等の作製
⑦ 原資料及び画像データ等の保存処理

① 対象資料の選定

香港大学図書館ではデジタル化の対象資料を選定する際には、まず候補資料が次のいずれかの基準を満たすかを判断していた。

【第 1 基準】

・その資料がスキャン作業などのデジタル化の作業工程で損傷を受けることがないか？ ・もしくは一度スキャン作業を済ませれば、その後は利用に供することなく保存に専念させることが可能か？

この第 1 の基準を満たした後に、次のいずれかの基準を満たせば、デジタル化の対象資料とするとのことであった。

【第 2 基準】

・その資料は個々に、もしくは、コレクションとして香港大学もしくは地域にとって、かけがえの無い資料であること。 ・デジタル化することによってその資料に付加価値を与えることができること。 ・その資料は学際的な価値を持っていること。 ・その資料は、保存状態ならびに（もしくは）利用頻度によりデジタル化することが適当と判断されること。

② 対象資料の調査

「デジタル化の手引き」では、この段階で行うことは、「作業工数等を推定するためのコマ数、冊数、原資料のサイズ、資料種別、形態、劣化状況等の調査」であると記されている。研修で話を伺った外部委託による大型デジタル化事業の事例では、この段階での作業は、特別コレクション部のプロフェッショナルライブラリアンと委託業者のスタッフが担い、10,000 冊の貴重書の中から、選定基準にかなう図書を 1 点 1 点同定する作業や、数千冊の図書を、A4 サイズ内におさまる図書、折込み資料付きの図書、大型図書といった作業単位に分別する作業、劣化状況の調査等を行っていた。この段階がデジタル化の事業遂行上の最も困難なことの 1 つだったとのことであった。

③ デジタル化仕様書の作製

a）香港大学図書館のデータフォーマットの仕様

資料	ファイル形式[1]	備考
書類 図書 新聞	.TIFF .PDF .FLV[2]	・300dpi（最小値） ・8bit グレースケール非圧縮 TIFF ファイル、もしくはロスレス圧縮画像[3]（JPEG2000[4]など） ・画像はオリジナル資料の縦横比を維持して保存
写真	.TIFF	・300dpi（最小値）

	.JPEG/.JPG	・24 ビットグレースケールの非圧縮 TIFF ファイル、もしくはロスレス圧縮画像（JPEG2000 など） ・画像はオリジナル資料の縦横比を維持して保存 ・RGB、YCC をマスタファイルのカラースペース[5]として推奨
音声	.WAV .AIFF .WMA(lossless) .MP3 .WMA	・Bit Stream[6]　非圧縮 PCM 音源[7] ・モノラル音源 or ステレオ音源の決定は、元の音源の性質に拠る（例：音声 or 音楽） ・サンプリング周波数：96 もしくは 48kHz ・24bit word length[8]
動画	.AVI .MPEG2 .MP4(H.264) .MOV .FLV .WMV	・フレーム率 25 フレーム/秒(PAL[9]の場合)、30 フレーム/秒(NTSC[10]の場合) ・Dimension 720x576(PAL の場合)、720x480(NTSC の場合) ・縦横比　4:3、16:9 ・音源　リニア PCM、サンプリング周波数 48kHz、量子化ビット数 16 もしくは 24 ビット

[1] 赤文字は保存用のファイル形式。黒文字は公開用または圧縮後のファイル形式。
[2] Adobe Flash が標準で対応している動画のファイル形式。
[3] 圧縮前のデータと、圧縮・展開の処理を経たデータが完全に等しくなるデータ圧縮方法のこと。
[4] 保存用画像及び提供用画像として利用される。JPEG に比べ、高品質で高圧縮。可逆圧縮と非可逆圧縮が可能。圧縮率の自由設定が可能。
[5] カラースペースは色空間やカラーモデルとも呼ばれ、色を作り出す方法又はその範囲を意味する。
[6] デジタル放送などの、既に圧縮やスクランブルなど加工された信号をそのままの形で記録し、入力された信号と同じ形で出力すること。デジタル信号の情報のまま伝達または記録すること。
[7] PCM（パルス符号変調）方式により録音、デジタル化した音声データをアナログ変換して再生する音源装置。パルス符号変調とは、アナログ信号をＡ／Ｄ変換によりデジタルデータにすること。
[8] 標本化（サンプリング）と量子化について。たとえば、音のデジタル化は次のように行われる。音は空気の振動であり、振動の大きさを音量という。マイクを使って音を電気信号に変換すると、音量は電気信号の波形になる。この波形の進行方向を一定の時間間隔で区切り、その波の高さを拾いだす作業を標本化（サンプリング）という。この場合、標本化の時間間隔が短いほど、アナログ波形に近く、精度が高くなる。ただ、人間の可聴周波数はその上限が 20kHz 程度であるためその倍の 40kHz（１秒間に 40,000 回）でサンプリングすれば人間の可聴範囲はカバーできることになる（サンプリング定理）。サンプリングした音量（アナログ波高値）を波形の振動報告に一定の間隔で区切り、最も高い整数値を求

めることを量子化という。量子化は求める音質によって 8bit(256 階調)、16bit（65536 階調)などで行われる。通常 CD は 16bit/44.1kHz で記録されている。
[9] PAL 規格：ヨーロッパや中国などで採用されているカラーTV の規格。
[10] NTSC 方式：日本と米国で使われるテレビや VTR などで扱うコンポジット信号の規格。ヨーロッパでは PAL や SECAM 規格が使われている。

b) OCR ソフト

OCR ソフトウェアは、現在有償無償の様々なものが出回っているが、香港大学図書館で主に使用しているソフトウェアは ABBYY FineReader（http://finereader.abbyy.com/）であるとのことであった。「デジタル化の手引」では全文検索等に対応するための全文テキスト化は記述の対象外としているが、香港大学ではこれまで作成した 32 のコンテンツのうち、23 のコンテンツが全文テキスト化されている。これには、香港大学図書館がデジタル化の目的を、「資料保存のため」、「資料へのアクセスを容易にするため」、「知の交流のため」としているために、資料の検索性を高めることが、デジタル化事業の初期の頃から重要視されてきたことの結果だと思われる。

c) プラットフォーム

データ公開用のプラットフォームについては、以前は香港大学図書館のテクニカルサポートサービス部が自前で作成していたとのことだったが、7 年ほど前から Greenstone[11]や omeka（https://omeka.org/） といったオープンソースソフトウェアが提供されるようになり、現在はそれらを利用しているとのことであった。現在香港大学図書館では、32 のコンテンツを、写真も動画も扱えるシングルプラットフォームで提供することを検討しており、テクニカルサポートサービス部では、プラットフォーム候補として Fedora commons（http://www.fedora-commons.org/）と CONTENTdm[12]を、検索エンジンとして solr（https://lucene.apache.org/solr/）を実装することを検討しているとのことであった。これら現在検討中のソフトウェアも基本的に無償のオープンソースソフトウェアである。オープンソースソフトウェアを用いることについては、お金がないから、ということも理由の１つに挙げておられたが、一番の理由は、非常に高性能でユーザーフレンドリーなオープンソースソフトウェアが提供されているのだから、それらを自分たちでカスタマイズしたほうが、自由度が高く、トラブルへの対応もしやすいと判断したためであるとのことであった。香港大学図書館のデジタル化事業は、このテクニカルサポートサービス部の技術力の高さに支えられている。

[11] ユネスコが無料で配布しているオープンソースソフトウェア。現在日本語化が進められている。http://www.greenstone.org/
[12] CONTENTdm は無償ではないが、香港大学図書館は OCLC の Credit and Incentive Program で得たクレジットにより、廉価で取得することができるとのことであった。http://www.contentdm.org/

d) 委託業者に提示した入札条件

香港大学図書館が、2 度目の大型外部委託プロジェクトの委託業者の選定にあたり、示した条件は次のようなものであるとのことであった。なお、当該プロジェクトのデジタル化対象資料は、貴重書および一般書から成る 3,150 冊で、西洋の中国に関する貴重書（約 66,500 頁）、漢文の貴重書（約 174,000 頁）、英字新聞（約 180,000 頁）、西洋の貴重な雑誌（約 115,000 頁）1945 年以前の香港に関する文献（約 61,000 頁）などである。

・劣化した資料の取扱いに関する指示を守ること。
・製本された図書の取扱いに関する指示を守ること。
・折込みページのある図書の取扱いに関する指示をを守ること。
・OCRによる本文テキスト化の精度は、英語は 95%、中国書は 90%を達成すること。
もし達成しなかった場合は、手入力により補完すること。
・知財権に関する指示を守ること。
・貴重書は毎日、作業終了時に保管場所へ戻し、作業室に置いたままにしないこと。
・納品が遅れた場合は、ペナルティを科する。

④　画像データのサンプル作製

「デジタル化の手引」では、④および⑥については、委託業者が行うものとされている。研修においても、この点については触れられなかったので、省略する。

⑤　サンプルの検証

「デジタル化の手引」では、この段階において「④で委託業者が作成したサンプルについて、仕様書で定めた要件に適合しているか検査する」「画像データに関する品質は、解像度、解像度分解能、階調、色調再現性等の観点から評価を行う」と記されている。

香港大学図書館でもデジタル化の際に、最も気を付けることは、解像度であるとのことだった。講義で紹介を受けたのは、目視検査による画像の検査で、解像度の異なるサンプルデータを複数用意し、サンプルデータ毎に、ファイルサイズとスキャンに要する時間を計測していた。解像度が高ければ、画像は細部まで鮮明に再現されるが、ファイルサイズは重くなり、スキャンに要する時間は長くなる。逆に解像度を低くすれば、ファイルサイズは軽くなり、スキャンに要する時間は短くて済む。香港大学図書館では目視による画像の鮮明さと、ファイルサイズやスキャンに要する時間を秤にかけて最適な解像度を決定している、とのことであった。（なお、デジタルデータのその他の品質検査方法については、「デジタル化の手引」に詳しい。）

⑥　画像データ等の作製

④に同じ

⑦　原資料及び画像データ等の保存処理

「デジタル化の手引」では、委託業者から受け取った納品物を媒体に保存し、収納する、いわば物理的な保存方法についての説明がなされているが、香港大学図書館の研修では、作成した各種データの旧式化を防ぐために、データのフォーマットを定期的に新しいものに更新している、というデータ保存処理に関する説明を受けた。フォーマットの仕様については、アメリカ議会図書館のガイドライン（http://www.digitalpreservation.gov/formats/content/video.shtm）を参照しているとのことであった。

〈所感〉

香港大学図書館のデジタル化事業の特徴の 1 つは、95 年の事業開始以来、今日まで途切れることなくデジタル化に取り組み続け、コレクションを構築し続けていることであると思う（下記年表参照）。筆者の個人的な感覚では、デジタル化事業は、図書館の通常業務とは別の、年次計画もしくは単年度の特別なプロジェクトで行うことであって、継続的に行うものではないように捉えていたのだが、香港大学図書館では、積極的に機会を捉え実績を積み上げ続けてきている。これには、海外ではライブラリアンの地位が日本に比べて高く、専門職化しているため、長く経験を積み知識の豊富なライブラリアンが存在することも大きいと思われる。しかしそれ以上に、香港大学図書館では、香港大学のビジョンである”Knowledge Exchange （知の交流）”を図書館のビジョンおよびミッションと定義し、「知」を社会に公開して社会の発展に寄与することに重きを置いて業務を進めることが尊重されていることがあるのでは、と感じた。

1995 年	プロジェクト開始。
1996 年	最初の大型プロジェクト（ExamBase[13]）を完了。
1997 年	卒業生より 100 万香港ドル（約 1,300 万円）の寄付を受ける。
1998 年	外部委託を開始。
1999 年	出版社などの版権所有者から許可を得てデジタル化する、大型プロジェクトに着手。
2002 年	中国語文献をデジタル化する最初のプロジェクトを完了。
2005 年	日本の図書館が所蔵する中国文献に関するプロジェクトを完了。
2005-2007 年	CADAL プロジェクト[14]に関する浙江大学との協定に基づき、デジタル化のための図書を深圳に送付する。
2006 年	香港大学機関リポジトリに着手。
2006 年	Hong Kong Memory Project[15]に参加。
2008-2009 年	大型プロジェクトの外部委託を初めて実施。
2010-2011 年	2 度目の大型プロジェクトの外部委託を実施。

2013 年　直近のデジタル化プロジェクト（Luke Him Sau Architectural Collection）に着手。

[13] 先述の香港大学の過去の定期試験をデジタル化したコンテンツのこと。学生の定期試験の過去問を知りたいというニーズに応えたユニークなコンテンツ。
[14] CADAL（China Academic Digital Associative Library）は、中国の 70 以上の大学とインド、アメリカ、ヨーロッパの大学等の研究機関が連携し、中国関係の資料をデジタル化するプロジェクト。清代以前の古典籍、中華民国期（1912 年－1949 年）の図書・雑誌、欧文図書、博士論文、現代書等 260 万冊以上の資料がデジタル化されている。
[15] Hong Kong Memory Project は香港の歴史的、文化的遺産を収集、保存、公開、普及するために香港ジョッキークラブと政府が共同で進めるデジタルリポジトリ構築プロジェクトのことである。同クラブによる 8,000 万香港ドルの寄付によって設立された。

参考文献・サイト

・NPO 知的資源イニシアティブ『アーカイブのつくりかた　構築と活用入門』勉誠出版, 2012, 240p.
・国立国会図書館講演会「中国の資料デジタル化プロジェクト : 国際連携を進める CADAL」http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/cadal.html　[accessed 2014-2-21]
・国立国会図書館関西館電子図書館課「資料デジタル化の手引 2011 版」2011, 96p.(http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/digitalguide.html) [accessed 2014-2-1]
・秀和システム第一出版編集部『最新標準パソコン用語事典 2013-2014 年版』秀和システム, 2013,1389p.
・後藤忠彦監修『デジタル・アーキビスト概論』日本文教出版, 2006, 175p.
・後藤忠彦監修『デジタル・アーカイブ要覧』教育評論社, 2007, 174p.
・デジタルアーカイブ推進協議会『デジタルアーカイブ白書 2005』デジタルアーカイブ推進協議会, トランスアート, 2005, 215p.
・The Hong Kong Jockey Club, ”Hong Kong Memory”、http://charities.hkjc.com/charities/cultivating-arts-and-culture/english/related-projects/projects/hk-memory.asp　[accessed 2014-2-21]
・”Hong Kong Memory Project：Fact Sheet”, 2006. http://www.hkjc.com/english/news/images/HK_Memory-factsheet-e.doc [accessed 2014-2-21]

(5)　Networking and collaborations

講師：Mr. Peter Sidorko, University Librarian；中野嘉子氏、香港大学現代語言及文化学院日本研究副教授

冒頭 15 分ほど中野嘉子氏より、香港特別行政区における様々な地理・歴史・環境などの

影響を受けた香港独特の高等教育の特徴について説明を受けた。その後、Peter Sidorko 氏から 45 分ほど、53 枚のパワーポイント資料により、香港地区大学図書館同士のネットやフォーラム等を通じた、独特かつ深い内容の共同運用体制について、「JULAC（Joint University Librarians Advisory Committee)」、「HKALL（Hong Kong Academic Library Link)」、「PRDLA（The Pacific Rim Digital Library Alliance)」について講義を受けた。内容(概要)は以下の通り。

〈香港の高等教育について〉

香港では、香港大学をはじめとした 8 つの大学が政府機関である大学補助金委員会(University Grants Committee＝UGC)から資金を受けており、これらの大学は運営において、政府の影響を受けていると言える。香港では 1992 年の本土返還が決まった際、設立の比較的新しい大学も格上げされ、「頭脳流出」を止めるために大学を充実するという方策をとった。例えば香港浸会大学（Hong Kong Baptist University）のような旧キリスト教の教義で建った大学など、本来なら公立としてお金を出すのは何か理論的にはおかしい感もするが、「頭脳流出防止」という観点に立ち、そのようなところにも資金を出すという判断がされた。その結果、8 大学によるコンソーシアムができ、UGC の資金により、教員を雇い、学費も安く抑え、裕福ではない家庭の子どもでも大学に進学できるような、手厚い金銭的な保護をした。

学費が安いと同時に頭脳流出防止の政策として、奨学金を厚く用意している面も上げられる。ローンが非常に低金利、そして奨学金が多種多様であり、多く活用されている。親の所得が高くない、あるいは親の世代も学歴が、父親で大卒 3 割、母親が 2 割しかいないという背景もある。「一家で初めて大学生を出す」ということをキャッチフレーズにした奨学金もあり、親の世代の学歴を脱却し、たとえ低い所得の家庭であってもたとえば香港大学を出ることで社会の中に入って行けるような上昇志向のシステムが作られている。それを香港社会全体で認知しているようである。

香港では世界ランキングでのレベルが高い大学が多いが、これは香港がイギリス寄りの教育システムである、ということも理由の一つだろう。それでも香港の高等教育は全体的に成功していると言える。大学の国際化が非常に進んでいることもその一例と言え、例えば香港大学では、10 年前には殆ど香港人が中心だった学生が今 80 ヶ国から学生が来ている。この 10 年間で比較的スムーズに国際化や留学生対応に馴染んでいけたということも言えるであろう。その一方、香港の教育システムが、もともとコロニアム（植民地）システムをそのまま受け継いだところに、アメリカでの教育の影響を受けた学長や役員等が増えたため、システムが複雑になっているという面もある。

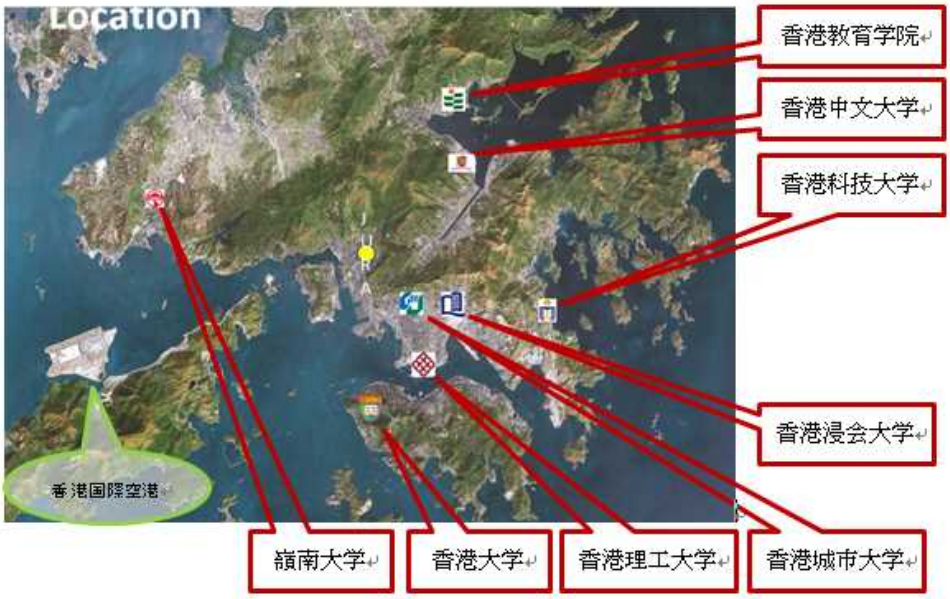
学生の出身先比率を見ると、8 割は現地(香港)、1 割を大陸(中国)以外の海外、残り 1 割が大陸(中国)である。この 1 割（800 人）のところに大陸から 12,000 人の応募があり、相当優秀な学生が選抜されることも、香港地区の大学のレベルを押し上げてきたことの一要

因とも考えられている。留学生の学費に関して言うと、国籍に関係なく香港の ID を持っていて永住権を持っている人たちは日本円にして 50 万円強であるが、本土などから来るそれ以外の人たちは、学費が 10 万香港ドル(日本円にして 130 万円)位にもなる。 5 年位前までは本土からは「高くて来られない」と言う声が多かったが、今は、富裕層の増加により殆ど聞かなくなった。

〈JULAC について〉

The Joint University Librarians Advisory Committee (JULAC)は、香港特別行政区の大学補助金委員会(UGC)の資金で運用されている、下記 8 つの高等教育機関の図書館が、図書館の情報資源とそのサービスについて、討議し、調整し、協力し合うための組織である。大学校長会（Heads of Universities Committee）によって 1967 年に設立された。各大学の地図上の位置関係は次の通りである。

・香港中文大学：Chinese University of HK (CUHK)
・香港城市大学：City University of HK (CityU)
・香港浸会大学：HK Baptist University (HKBU)
・香港教育学院：HK Institute of Education (HKIEd)
・香港理工大学：HK Polytechnic University (PolyU)
・香港科技大学：HK University Science & Technology (HKUST)
・嶺南大學：Lingnan University (LU)
・香港大学：University of Hong Kong (HKU)



（香港大学提供の資料を元に作成）

JULAC の原則は、構成大学すべての学生と教職員スタッフや来客者に対し、JULAC の所蔵資料や情報資源やサービスへの包括的、全体的、継続的、そして戦略的なアクセスを

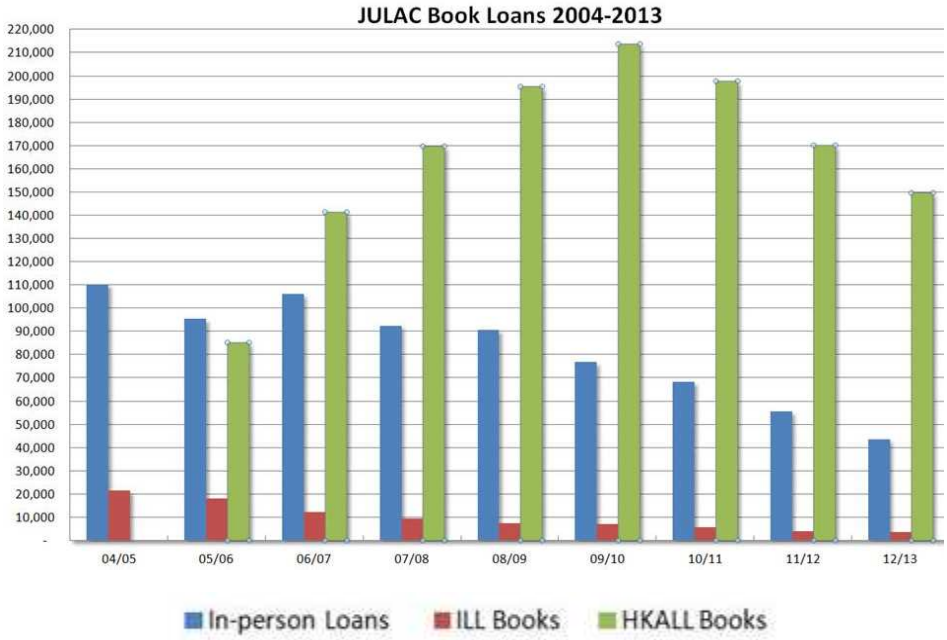
提供可能とする統合を行い、個々の大学図書館の資源とサービスを拡大・強化・補足していくプログラム作成を行うことである。各大学のニーズや優先度合などの状況により個別のプログラムに参加しないことも可能で、JULAC 全体としては、8 つの大学の内の少なくとも 6 つの大学が合意すれば、プログラムを進めることができる。各大学の管理者やスタッフは積極的に JULAC に関与することが求められ、各大学は規模や利用レベルにより共同でプログラムへの資金提供を行う。

JULAC のプログラム運用のため、「アクセス・サービス委員会」「文献サービス委員会」「統計委員会」「学習戦略委員会」「メディア委員会」「著作権委員会」「スタッフ開発委員会」など、多くの委員会により活動がなされている。コンソーシアム活動も活発で、研究書収集の取組を HKMAC（Hong Kong Monograph Acquisitions Tender）、電子ブック収集の取組を ERALL（Electronic Resources Academic Library Link）と呼んでいる。

〈HKALL（Hong Kong Academic Library Link）について〉

JULAC において構築した図書館情報資源に的確・継続的にアクセスするため、JULAC アクセス・サービス委員会（JULAC Access Services Committee）の下、HKALL という参加館所蔵情報の集約のためのホームページ作りが進んでいる。

この HKALL の活用を始めとした参加間同士での直接訪問や ILL システムの活用が以下のように 2005 年以降大規模かつ継続的に進んでいる。



また、以下のように、香港以外の地域と比較して、HKALL は 1 館当たりのリクエスト件数が高く、またリクエストに対するリクエスト達成率も高いなど、活発に利用されていることが分かる。

1館当りのリクエスト数

INNReach System	Libraries	Total Requests	Requests per Library
Hong Kong ALL	***8***	***221,348***	***27,669***
Prospector	25	670,719	26,829
SearchOhio	17	418,043	24,591
LINK+	45	583,621	12,970
Mobius	14	178,645	12,760
The Circuit	5	52,496	10,499
OhioLink	87	804,022	9,242

January-December 2009

Requests	221,348
Fulfillments	207,164
Fill Rate	93.6%
Dollar Value of Shared Material	*$10,358,200 USD**
Dollar Value per Library	*$1,294,775 USD**

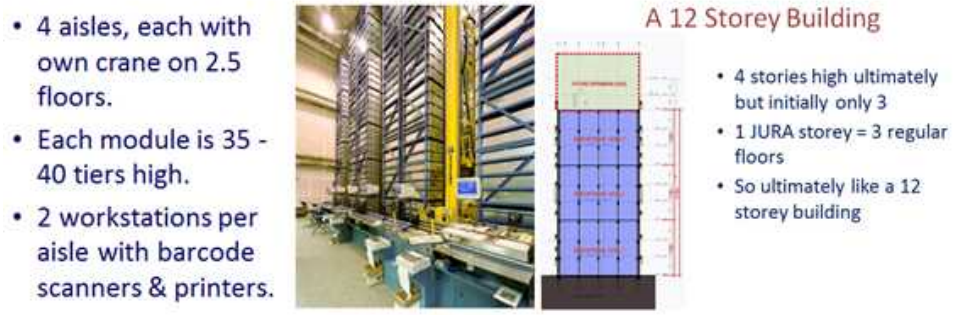
達成率

**Based on an average of $50 USD to purchase, process and shelve a book*

仮に1冊50ドルとして購入した場合の効果（全体と1館当り）

HKALL では更に長期的な観点で機能性の向上と資料保存に取り組むため、JURA（Joint Universities Research Archive）という、収蔵庫建設のプロジェクトを香港大学の先導で進めている。収蔵可能冊数は、初めは約 630 万冊、その後 2030 年までには 995 万冊まで拡大したいとのことである。そこには資料の高さ（20 ㎝・4%、26 ㎝・49%、31 ㎝・42%、39 ㎝・5%）に対応した 1.2×0.6mの金属製の置き場が 59,000 個セクター分け設置され、35-40 段を基準に保管、その通路の間に 2.5 階建て相当のクレーンが設置され、各通路の前に 2 台ずつバーコードスキャナーとプリンターが設置される予定とのことである。

自動大型貸出保存庫の予定図（香港大学の資料より）



〈PRDLA（The Pacific Rim Digital Library Alliance＝環太平洋デジタル連合）について〉

1995 年に構想が始まり、現在、太平洋を囲む 28 大学図書館の共同により各館のデジタルコレクションのアーカイブデータを提供している。現在の参加大学は、香港大学、香港中文大学、 香港城市大学、香港浸会大学、オーストラリア国立大学 、復旦大学 、国立台湾大学、シンガポール大学 、北京大学、ソウル大学、シンガポール経営大学、スタンフォード大学 、清華大学、オークランド大学、ブリティッシュ･コロンビア大学、カリフォルニア大学バークレー校、カリフォルニア大学アーバイン校 、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 、カリフォルニア大学マーセド校 、カリフォルニア大学サンディエゴ校 、ハワイ大学マノア校、マカオ大学 、オレゴン大学、オタゴ大学、サザンカリフォルニア大学 、ワシントン大学、武漢大学、浙江大学である。

PRDLA の発展過程は次の通りである。 1995 年から 2001 年までに、PRDLA メンバーであるカリフォルニア大バークレー校とサンディエゴ、そして OCLC によって多言語ソフトが開発され、中国語・日本語・韓国語での検索ができるようになった。また、中国の文化的な遺産アーカイブや中国の文化革命に関連した主要な研究資料のオンライン・アーカイブも掲載した。2002 年以降は年間会費とメンバーシップ制での運営を開始し、Oceania Digital Library(ODiL)の参加や PRDLA 参加館のデジタルコレクションの新ポータルサイトである“PRL”ができるなど充実していった。2013 年以降については、PRDLA のメンバーの中で専門的技術をより深く掘り下げ創意工夫や新しい発想を生み出していけるようなスタッフディベロップメントの交流を行っていきたいと考えている。

参考文献・サイト

・PRDLA　http://prl.lib.hku.hk/exhibits/show/prdla/home　[accessed 2014-2-14]
・JURA Project　http://www.julac.org/?page_id=258 [accessed 2014-2-14]
・University Grants Committee　http://www.ugc.edu.hk/eng/ugc/index.htm　[accessed 2014-2-14]

(6)　JULAC Forum

〈概要〉

JULAC Forum は、前述の JULAC が年に１度開催する加盟図書館職員間の情報交換のための会合である。JULAC Forum の目的は、加盟館および JULAC の各委員会が達成した業績、もしくは直面している今後の課題について、忌憚のない情報交換をすることである。JULAC Forum では、加盟館および JULAC の各委員会が、その年度のテーマに関連する内容のプレゼンテーションを行うこととなっている。

〈2013 年度 JULAC Forum について〉

私たちが参加した 2013 年度の JULAC Forum は、香港浸會（バプティスト）大学で開催され、本会のタイトルは 「334 制時代[16]を生きる： 私たちのコミュニティとともに（Living in the 334 Era: Engaging Our Communities）」であった。また、今年度のテーマは「存在感を増す情報技術とデジタルサービスについて」と「学習戦略と学習スペースについて」であった。約 250 人の加盟館職員が一同に会し、JULAC の今年度の活動評価と、JULAC の今後の施策の方向性を共有するとともに、各大学の図書館が 334 制時代において、それぞれのコミュニティをいかに引き込むかということについての意見を共有していた。

プログラムは、以下のようなものであった。（より詳細なプログラムの内容については、JULAC のウェブサイト(http://www.julac.org/?page_id=3182)を参照のこと。

16　香港の新しい教育制度。旧来の小学校６年、中学校５年（大学に進学する場合は、２年間の予備課程が必要）、大学３年という制度から、日本と同じく小学校６年、中学３年、高校３年、大学４年という制度へ変更された。大学では 2012 年度から本格的に４年制へ移行した。

〈2013 年度 JULAC Forum のプログラム〉

9:00-10:15	開会の挨拶 基調講演 JULAC の今年度の活動報告
10:15-10:45	Tea break および、各グループの写真撮影
10:45-12:45	JULAC 各委員会によるプレゼンテーション ・アクセス・サービス委員会ならびにシステム委員会 “JULAC Common Card Project” ・Consortiall “JULAC Joint PDA eBooks” ・著作権委員会 “RAE 2014, Licensing & Copyright Issues”

	・学習戦略委員会 “Chatting up a Storm? Collaborating on Chat Reference” ・香港理工大学 “Student Rover Service: The Pao Yue-kong Library, The Hong Kong Polytechnic University’s Perspective“
12:45-14:00	昼食
14:00-14:30	図書館ツアー
14:30-15:45	JULAC 加盟館によるプレゼンテーション テーマ 1: 存在感を増す情報技術とデジタルサービスについて ・香港城市大学 “New Pedagogies with Innovative e-Learning Tools in Library Learning Commons? Experience Sharing from CityU” ・香港浸會大学 “Chinese Medicine Digital Project: Emerging Services for Teaching and Learning” ・香港理工大学 “e-Learning Support: Connecting Library Resources to Learning Management System” ・嶺南大学 “Different Strokes for Different Folks? Lingnan’s Experience with the New Sierra Library System”
15:45-16:15	Tea break
16:15-17:30	JULAC 加盟館によるプレゼンテーション テーマ 2: 学習戦略と学習スペースについて ・香港中文大学 “The CUHK Learning Garden: It is MORE than a Learning Space!” ・香港教育学院 “Provision of Library Services at an Off-campus Study Centre” ・香港科技大学 “Engaging Students via E-learning: Joy、 Challenges、 & Opportunities” ・香港大学 “New Premises: A Renewed、 Collaborative HKU Education Library Experience”
17:30-17:45	閉会の挨拶

スケジュールの都合により、私たちが主にプレゼンテーションを聴くことができたのは、16:15 以降のプログラムであった。それらの発表の概要を以下に簡単に記す。なお、タイトルは筆者の訳によって原文のニュアンスを損なわないように、原文のまま紹介している。

・16:15-16:30
香港中文大学図書館
タイトル：*"The CUHK Learning Garden: It is MORE than a Learning Space!"*
内　　容：2012 年 11 月に 24 時間オープンを開始したラーニングガーデンについての発表。このプレゼンテーションでは、ラーニングガーデンの 1 年間の取り組みの内容と、今後も学びと共有の空間として学生に受け入れられ続けるための施策についての報告がなされていた。

・16:30-16:45
香港教育学院
タイトル：*"Provision of Library Services at an Off-campus Study Centre"*
内　　容：香港教育學院は 2012 年にキャンパス外に学習のためのスペースをオープンした。このプレゼンテーションでは、香港教育學院図書館が限られたスペースとフルタイムの職員不在の中で、キャンパス外にて、図書館サービスを提供した経験をについての報告がなされていた。

・16:45-17:00
香港科技大学
タイトル：*"Engaging Students via E-learning: Joy, Challenges, & Opportunities"*
内　　容：香港科技大学図書館の E-ラーニングチームは、昨年度 30 以上の E-ラーニングコンテンツを作成した。このプレゼンテーションでは、香港科技大学が E-ラーニングを作成することとなった動機、E-ラーニングを作成する中で直面した問題、そして得られた喜びについての報告がなされていた。

・17:00-17:15
香港大学
タイトル：*"New Premises: A Renewed, Collaborative HKU Education Library Experience"*
内　　容：香港大学教育学図書館では、教育学部とこれまでになく距離を縮めるために"shared learning space" を開始した。このプレゼンテーションでは"shared learning space" のこれまでの過程と、このような取り組みのメリットとデメリットそして、利用者が体験した事柄についての報告がなされていた。

〈所感〉

JULAC Forum は、その参加者の規模やプログラムの内容から、日本の私立大学図書館協会総会・研究大会に相当する会合であろう。私立大学図書館協会総会・研究大会同様、JULAC Forum では、香港の大学図書館が直近の 1 年間に行ってきた活動や、香港の大学図書館界が最も関心を寄せているテーマについての各大学の取り組みの内容が発表されていた。香港の大学図書館は、日本の図書館界にとって最も身近な図書館先進国の 1 つであるため、JULAC Forum での発表内容は私たちにとって参考になる事柄が多く含まれている。幸いにして、当会の各プレゼンテーションのサマリー、パワーポイントのスライド、そして動画が、JULAC のウェブサイト(http://www.julac.org/?page_id=3182)で提供されているため、今後も JULAC Forum で発表される内容については、引き続き参考にしていきたいと思う。

参考文献・サイト

・伊佐勝秀「香港の教育・研究事情を覗いてみると」『東アジアへの視点』2003
http://shiten.icsead.or.jp/201303/201303_77_82.pdf [accessed 2014-2-1]
・JULAC　http://www.julac.org/ [accessed 2014-2-1]
・香港図書館協会『HKLA News Letter』94, 2013
http://www.hkla.org/newsletter/Dec13.pdf [accessed 2014-2-1]

２．訪問機関

(1)　　香港大学　University of Hong Kong

〈大学概要〉

香港大学は 1912 年に開校した、香港で最も古い高等教育機関（正確には第 3 段階教育機関= tertiary education institution）である。香港大学の前身は Hong Kong College of Medicine for Chinese で、このカレッジの最初の学生に孫文もいた。現在の香港大学は 10 の学部（建築、芸術、経済経営、歯学、教育、工学、法律、医学、科学、社会科学）を持ち、27,000 名の学生（学部生 15,000 名、院生 12,000 名）が学ぶ研究型総合大学である。世界の大学ランキングでも上位にランクされる。また、中国大陸からの学生と外国人留学生を合わせて 9,300 名で、1,000 名の交換留学生がいる。6,100 名の教員、研究者がおり、専任教員では北米、ヨーロッパ出身者が多い。メインキャンパスは香港島の西側に位置しており、全ての学部はこのキャンパスあるいはその近隣のキャンパスにある。

〈図書館概要〉

香港大学にはメインライブラリーが 1 つと、6 つの専門図書館（Dental、Education、Law、Medical、 Music、 Chinese）があり、215 名のスタッフが勤務している（うち 34 名が専門職員としての図書館員）。ライブラリアンなどのプロフェッショナル職は、図書館情報学またはその他の分野での大学院レベルの学位が必要である。香港大学の何名かのライブラリアンにどこで図書館情報学の学位をとったのか聞いてみたところ、オーストラリア、カナダ、アメリカなど、海外の大学がほとんどであった。香港大学でも現在は図書館情報学修士コースがあるが、まだ歴史は浅いそうである。香港大学図書館全体の蔵書数は 296 万冊、電子ブックは 350 万冊、電子ジャーナルは 55、000 タイトル、データベースは約 690 種類である。メインライブラリーの 3 階がラーニング・コモンズ的なスペースに改修され、テクノロジー、スタディ、コラボレーション、多目的、ブレークの 5 つのゾーンが誕生した。詳細は次項で紹介する。また、図書館オリエンテーション、情報リテラシーのワークショップ等も開催しているが、ライブラリアンが大学の授業で教えるということはないとのことであった。

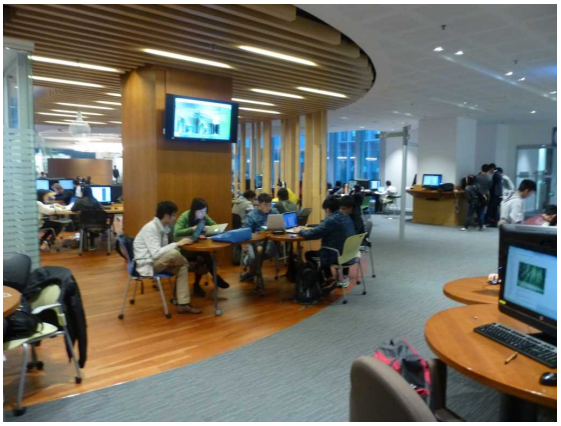
〈ラーニング・コモンズ〉

香港では、2012 年に大学が 3 年制から 4 年制に移行するという変革(“334 Scheme Academic Reform”)があり、政府機関である大学補助金委員会（University Grants Committee=UGC）から補助金提供を受けている香港の 8 つの大学では、この移行に伴い必要となる改修等を行うための補助金が与えられた。今回見学した 4 つの大学図書館はいずれもこの補助金を用いて図書館の増改築を行い、いわゆるラーニング・コモンズを設置したようで、どの大学でも新しいラーニング・コモンズを見学することができた。

香港大学には 2 つのラーニング・コモンズがあり、一つは図書館の 3 階に、そしてもう

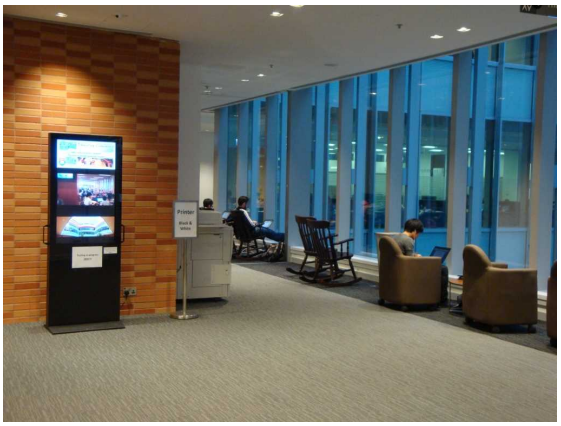
一つは新しくできたセンテニアルキャンパスに智華館（Chi Wah Learning Commons）として独立して存在する。Chi Wah Learning Commons は図書館の管轄ではないが、利用者の情報探索ニーズに応えるため、図書館スタッフも置かれている。

〈Chi Wah Learning Commons 1〉



〈Chi Wah Learning Commons 2〉

〈オンラインで予約できる個人研究室〉



〈デジタルサイネージとリラックスソファ〉

図書館 3 階エリアは正式には”Level 3”と呼ばれ、ラーニング・コモンズという名称は使われていない（改修も UGC の補助金ではなく、個人の寄付で行われた）。しかし、IT を多用している、個人または共同学習と必要に応じて使い分けることができる、リラックスできるスペースがある、そして図書館スタッフによる人的なサポートがあるといった、ラーニング・コモンズと同じようなサービスを提供するスペースである。Level 3 は大きく 5 つのエリアに分かれている。テクノロジーゾーンでは、80 台以上のネットに接続されたパソコンが利用可能で、いくつかのパソコンではスキャナーも利用できる。スタディゾーンには自由に利用ができる個人席と、上級生用には、1 席ごとにパーティションで区切られた机がある（QR コードを利用して予約する）。さらに静かに学習するためのスペースとしては、パソコン等の利用も不可の”deep quiet room”もある。コラボレーションゾーンでは、共同

作業ができるような机とパソコンのあるオープンスペース、そして電子黒板、ウェブカメラ、カメラレコーダー、インタラクティブテレビなどの最新の機器を備えたグループディスカッションルームを使うことができる。多目的ゾーンは用途に合わせた使い方のできるエリアである。普段はキャスター付きの机と椅子があり、学生は好きな場所に移動して使うことができる。ブックトークや展示などのイベント開催時には防音の部屋として区切ることができ、音響システム、録音やプロジェクターといった機器も備えてある。ブレークゾーンはテレビ、新聞、雑誌、スナックや飲み物の自動販売機があり、飲食をしながらリラックスすることができる場所である。また、これらの 5 つのエリアの中心にはインフォメーションカウンターがあり、図書館スタッフがパソコン等の機器操作、図書館の利用案内、情報検索などのサポートを行う。図書館を利用中にカウンターにふらっと立ち寄ることももちろんできるほか、一対一でのリサーチコンサルテーションも行っている。

〈コラボレーションゾーン〉

〈スタディゾーン〉

〈多目的ゾーン〉

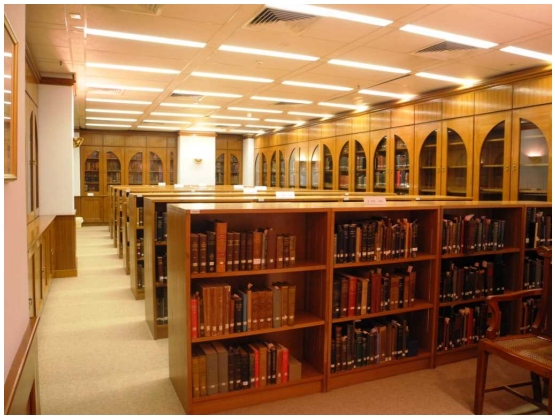
〈インフォメーションカウンター〉

〈テクノロジーゾーン〉

〈ブレークゾーン〉

〈特殊コレクション〉

今回の研修では、香港大学図書館の特殊コレクションとして、Special Collections Room および Chinese Rare Book Room を見学させていただいた。Special Collections Room には、香港の歴史や生活に関する出版物を集めた Hong Kong Collection がある。香港に関する資料としては最も網羅的なコレクションであり、香港大学図書館は、香港で出版された印刷資料のデポジトリの役割を果たしている。また、有名なコレクションとしては、Morrison Collection、 Hankow Collection がある。Morrison Collection は、1842 年にマカオから香港に移った、香港で最も古い図書館と言われる Morrison Library の所蔵資料であり、香港大学が開学した際、大学図書館に引き継がれた。Hankow Collection は、1878 年に中国にいたイギリス人等に物資を供給していた Hankow Club が設置した図書館のコレクションで、1932 年に香港大学がこのコレクションのうち「中国」セクションを買い取ったもので、極東に関する西洋の古書が数多く含まれている。

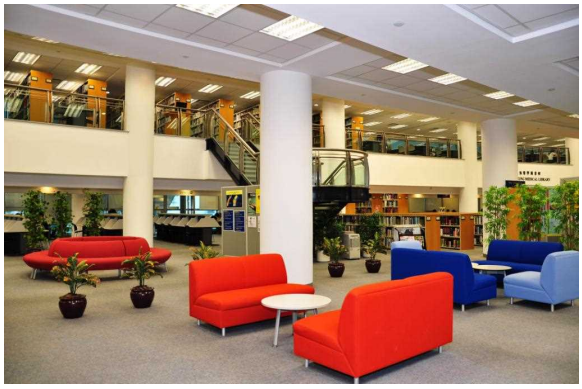


〈Special Collections の中の Rare Book Room。Morrison Collection などが収められている〉

〈Chinese Rare Book Room〉

〈Medical Library〉

メインキャンパスから車で 5 分程の少し離れた場所にある医学部棟の 1 階に、Yu Chun Keung Medical Library があり、ここでは Medical Librarian の Ms. Ruth Wong に図書館をご案内いただいた。1 階と中 2 階のみの、メインライブラリーと比べるとかなりコンパクトな図書館であるが、パソコン、グループ学習室、ワークショップ等が行えるコンピュータラボ、くつろげるソファーなど、メインライブラリーにある要素は揃っている。基本的な機器備品の他、例えば大きなストレスを感じている学生がお互いを励ましあえるような掲示板を設置したり、医学部の学生として知っておいてほしい医学に関する社会的問題の情報を掲示する、オリエンテーションで 3D メガネ（Primal Interactive Human https://www.primalpictures.com/Home.aspx）を使ったマルチメディアツールをトライアル体験させるなど、小さいながらも様々な工夫をしている様子が印象的であった。図書館自体は広すぎず、落ち着いた雰囲気で、このような場所を好む学生も多いかもしれないと感じさせる図書館であった。



〈Yu Chun Keung Medical Library〉

〈学生同士がコメントを書く掲示板〉

〈所感〉

これは香港大学図書館に限ったことではないが、訪問する先々の図書館で、多くの学生が個人、あるいはグループで熱心に勉強している姿が非常に印象的であった。研修中のどこかで、香港は住宅事情があまり良くなく、自宅で集中して勉強できるスペースがないので大学の図書館で勉強する学生が多い、という話を聞いた。確かに香港の街中は東京以上の人口密度ではないかと感じたことは多かったし、図書館だけでなく、キャンパスにいる学生も多いような気がした。それに加えて、香港の大学は世界でもトップクラスの大学が多く、予習復習に必要な時間も多いのかもしれない。それにしても、図書館内で睡眠をとる学生が目立つ日本の大学図書館とは大きく様子が違うものであった。

(2)　　香港科技大学　The Hong Kong University of Science and Technology

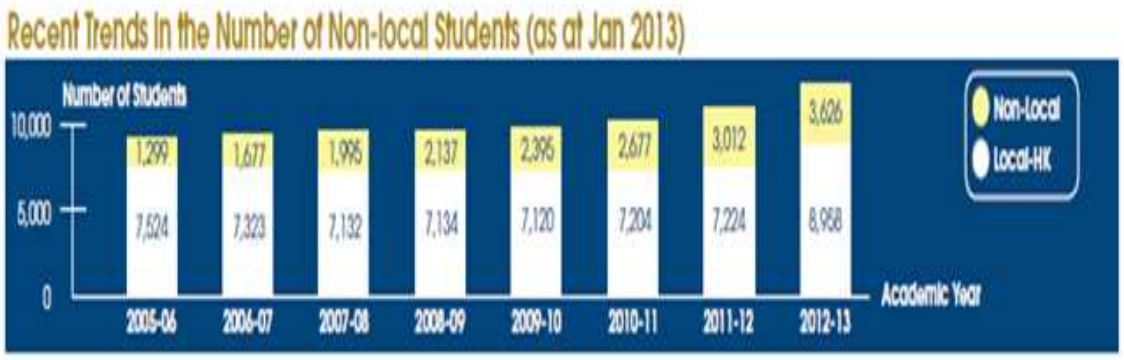
〈大学概要〉

設立は 1991 年である。最初の構想・設立準備段階では当時の香港総督エドワード・ユード（Edward Youde）とチャン(Yuen Chung)博士の尽力があった。開学の目的・方向性としては、1980 年代当時、急速に変化する世界経済の中、草分け的研究による知識ベースの経済を基盤にした科学者、全世界を目指したエンジニアや経営的リーダーといった、独創的な企業家を輩出していくことが香港に必要であると感じていた両氏の強い意志によって構想・計画された。開学後も世界を目指す国際的なカリキュラムにより、物理学、エンジニアリング、ビジネス、経営学といった、自然科学分野のみならず社会科学など様々な分野を含めた、創造的で企業家も意識した学生の教育が進められてきた。

2013 年の学生数は 12,584 名。ミッションは、特に、教育と研究を通して学習と知識を進めること、科学、テクノロジー、エンジニアリング、管理と実務研修で、そして大学院生のレベルで香港の経済で社会的な開発を援助すること、である。そしてビジョンは、有意で国際的な影響と強く地域に付託された大学であること、すべての分野において国際的に最先端の世界クラスの大学であること、中国の主要な大学として国の経済や社会の発展に貢献すること、知識ベース社会として香港の発展において、政府、ビジネスと産業と協力して、鍵となるよう役割を演ずることである。

最近の 8 年間は以下の表のように、香港地域の学生の増加とそれ以上の割合で香港地域外の学生も増加しており、ここにも世界を意識した運営がなされている様子が伺える。教育レベルや評価も高く、「QS　Asian University Rankings 2011-2013」で 1 位、「QS　World University Rankings 2012 で 33 位」など上位ランキングしている。

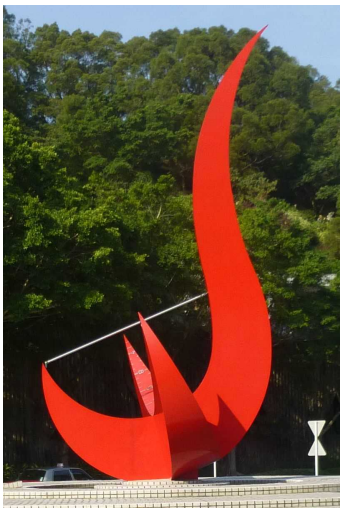
今後も科学、テクノロジー、ビジネスと人文科学における優秀で才能のある研究者や倫理的に信頼できるリーダーでもある将来の革新者と企業家の輩出をめざし、戦略プランを作成している。



〈図書館概要〉

われわれ一行は宿泊先ホテル（香港島香港大学付近）から車を使って約 1 時間かけて移動した。香港島にあるホテルから 30 分ほどにある海底トンネルを潜り九龍地区に出た後、

山間の整備された道路を 30 分ほど進むと、香港科技大学のシンボルである日時計のモニュメントのある大学入口ロータリーに降車した。そのモニュメントの目前の建物をくぐると目前に香港賽馬會大堂（Hong Kong Jockey Club Atrium）、その左側に大学図書館の李兆基図書館(Lee shau Kee Library)の入口（G/F 階のエントランス）がある。

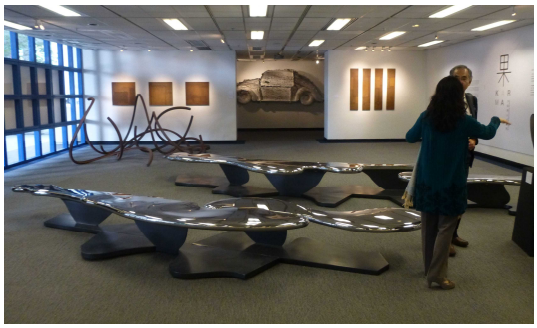


〈日時計のモニュメント〉

〈香港賽馬會大堂と李兆基図書館の外観〉

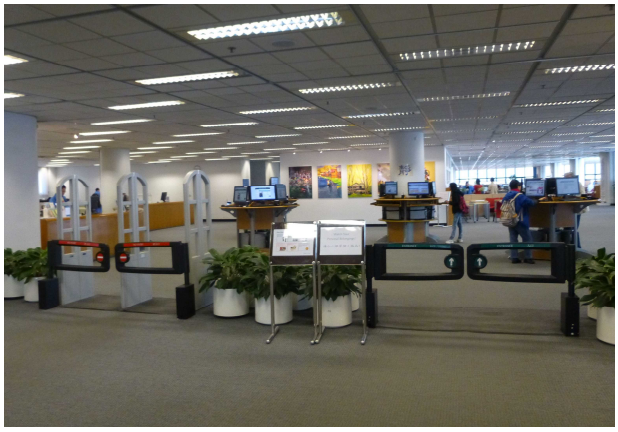
図書館入ってすぐのところは催事スペースとなっており、訪問時「果－李展輝山水雕塑」というテーマでのオブジェが展示されていた。

〈図書館外から見た催事スペース〉



〈展示スペース〉

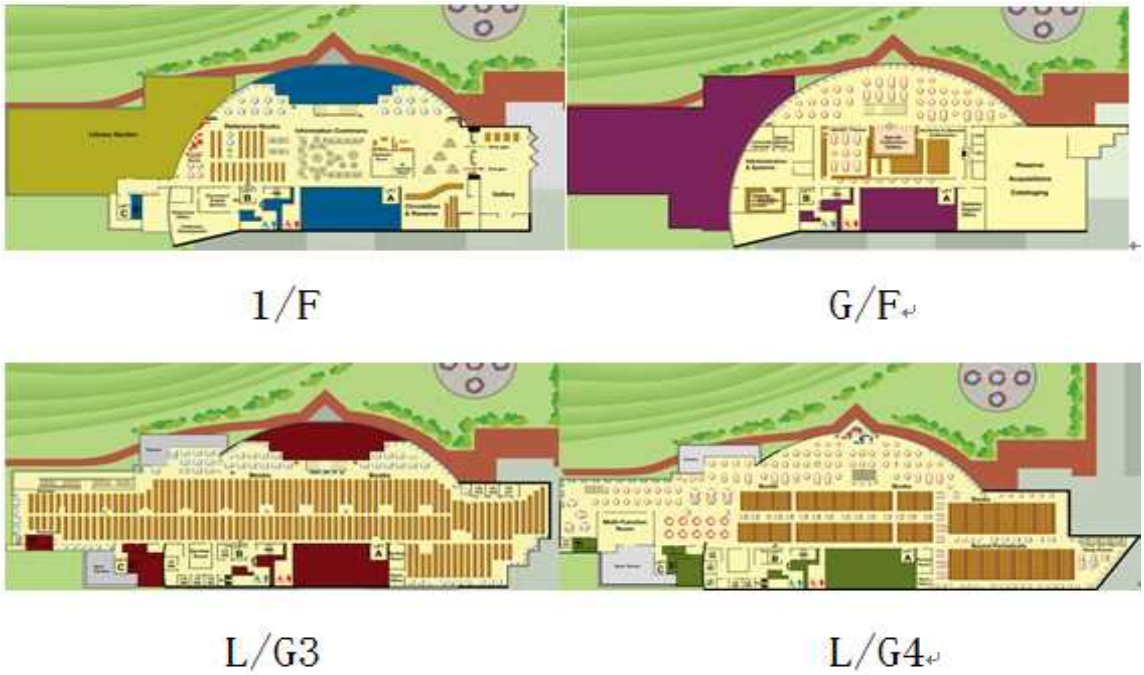
展示スペースの横に入館ゲートがあり、通過するととても広い閲覧・学習・教育・資料配架スペースが広がっている。



〈入館ゲート〉

〈吹き抜け〉

５つのフロアからなる図書館内はとても広く、オーシャンビューの吹き抜けもある。なお、図書館総スペースは頂いた資料によると 12,350 ㎡ということである。

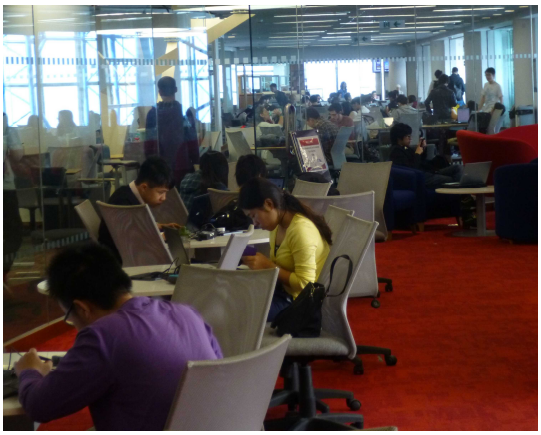


建物の階層の数え方は、地上階（日本の１階）を“ground floor (G/F)”と呼び、その上の階層を“first floor (1/F)”、“second floor (2/F)”…のように数える。さらに、下から順に、…「L/G2」→「L/G1」→「G/F」→「1/F」→「2/F」→「3/F」→「3/F」…となっている。

香港科技大学図書館では L/G 1 階はラーニング・コモンズ（其士綜合研習坊：Cheualier Learning Commons）となっている。

L/G1

〈L/G 1 階のラーニング・コモンズ〉



〈ラーニング・コモンズ内の様子〉

このラーニング・コモンズは、クループスタディゾーン、E ラーニングゾーン、リフレッシュメントゾーン、クリエイティブメディアゾーン、オープンスタディゾーンにゾーン分けされ、各ゾーン特有の設備、器具、配色などが施されている。ラーニング・コモンズ内の学習机は 6 人掛け、3 人掛け、4 人掛け円卓、1 人掛け個机、対面式、カウンター式など扇形を一部切ったような局面形状のものが多く、椅子もソファーのもの、重厚なもの、軽量スタイリッシュなものなど多様に揃えてあり、開放スペースのみでもざっと 200 席以上+ソファー席各所、併せて「LC」表示のあるプロジェクター等設備付き定員 5 名から 8 名程度の小部屋が 17 室、「チュートリアルスペース」というモニター付きの簡単な区切りのみ設定してある部屋が 1 室、授業との連動を意識した「Classroom」と呼ばれる大部屋が 2 室、さらに「AV コントロールルーム、Media Production スタジオ、AV Editing スタジオ、グラフィックスワークショップ」という映像ビデオ作成・編集・加工などのマルチメディ

アの一連の活用を意識した設備も同フロア内に設置されている。

併せてインフォメーションデスクやサービスカウンターなどスタッフによる利用支援の窓口があることは勿論だが、何よりも（これは科技大に限らず今回訪問したすべての香港の図書館で感じたことであるが）とにかく学生の利用率、座席の使用割合が高く、グループ・少人数また個人利用とあらゆる形態問わず真摯に話し合いや討論する、また真剣に調べものをしている姿に熱意が感じられ、その姿勢に呼応するようスタッフ側でもグループ討論や共同により学習内容を高次元へと磨き上げていける仕組み作りへの工夫がなされ続けている、という感じを受けた。貸出に関する統計については以下の通りである。（科技大から頂いた資料）

	2008-09	2009-10	2010-11	2011-12	2012-13
Checkouts(単なる)貸出	194,599	185,894	165,411	141,437	130,056
Renewals(更新)	76,621	85,451	79,187	71,114	64,830
Holds(保管、留置き)	5,559	7,103	6,516	5,700	5,487

蔵書についても大変充実しており、科技大から頂いた資料によると以下の通りである。

所蔵概要	印刷資料（printed volumes ）…710,141 電子資料（electric books ）…230,977 定期的刊行物（periodical titles：print and electric）…37,610 データベース（databases ）…293 マイクロフォーム（microforms） …356,822 メディア資料（media items ）…38,659 マルチメディア資料（streaming media items ）…4,910 デジタルコレクション（files in digital collections） …87,543		
所蔵詳細	【710,141 printed volumes の内訳】	VOLUMES	TITLES
	BOOK COLLECTION	602,716	547,653
	PERIODICALS	87,974	4,558
	REFERENCE	10,698	7,375
	RESERVE	1,392	915
	SPECIAL COLLECTION	7,361	6,117
	IN PROCESSING	688	
	【356,822 … microforms の内訳】	VOLUMES	TITLES
	Microfiche⇒341,284Units	21,084	11,904
	Microfilm⇒15,538Units	45,329	60,241
	【ONLINE RESOURCES の内訳】		
	ELECTRONIC BOOKS		230,977
	ELECTRONIC JOURNALS		33,052

	DATEBASES		242
	STANDARDS		1,864
	CONFERENCE		23,810
	STREAMING AUDIOS		494
	STREAMING VIDEOS		4,416
	SELECTED FREE RESOURCES		1,477
	【DIGITAL LIBRARY の内訳】	FILE 数	PAGE 数
	ANTIQUE MAPS OF CHINA	213	213
	DIGITAL ARCHIVES	24,734	185,425
	ELECTRONIC THESES	6,408	704,542
	INSTITUTIONAL REPOSITORY	3,048	55,121
	E-RESERVE	0	0
	NEWSPAPER CLIPPINGS	53,140	57,296
	LIBRARY WEB SERVER(pages/scripts)	63,430	29,565
	【COMPACT DISCS の内訳】	DISC 数	DATABASE 数
		793	51

上記に見られるように、65 万点以上の本や雑誌と何万もの紙以外の媒体（電子的なフルテキスト、視聴覚資料、マルチメディアやマイクロフィルム）から成っており、さらには、インターネット資源は図書館の WWW サーバーや図書館の情報ポータルに継続的に追加されている。工学、数学、そして科学分野に加え、ビジネス、人文科学、社会科学、芸術といった分野の資料も数多くある。全ての分野において資料の電子化が進んでおり、240 を越えるウェブのデータベースと、21,900 タイトルの電子ジャーナル、そして 118,000 種の電子ブックがある。これらの電子資源にはキャンパス内外からアクセスすることができる。

メディアコレクションとしては、科技大学では授業や研究をサポートすることとは別に、広い意味での教育のため、高価な音楽ＣＤ、西洋や中国の音楽、そして過去 100 年間にも及ぶ古いフィルムのビデオコレクションがある。

これらの資料がデジタル環境で効率的に利用できるよう、図書館 1/F には「Archives & Special Collections」「Special Collection Gallery」「HKUST Theses」というそれぞれのテーマに応じた展示室を並置するとともに、各所にデジタル映像モニターを配置し、上映している。

多様で高度な利用サービスがされている点については、各実務担当者からの講義（「香港科技大学におけるインフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズ」、「E-ディスカバリウィークとは」、「デジタル化の過程」など）により詳しい説明を受けることができた。

〈Diana Chan 館長よる香港科技大学と図書館の概要説明〉

〈Ms. Gabrielle Wong によるラーニング・コモンズの説明〉

〈Ms. Sintra Tsang によるデジタルライブラリーの説明〉

これらの講義や科技大学図書館にて配付された利用案内等の資料によると、科技大学図書館のミッションは、大学教育と研究プログラムのサポート、香港科技大学学生への一般教養の提供と推進、香港そしてこの地域に対する情報提供を行うことの 3 点である。このミッションをサポートするため、他の学術機関とパートナーシップを築いて相互貸借やほかの手段による情報アクセスのサービスを提供するなどし、学生の学びと教員の教育活動のサポートを、継続的に続けているとのことであった。

利用者へのサービスにおいては、アクセス・サービス、書誌学（図書目録学）サービス、蔵書構築、レファレンスと情報サービスを心がけているが、近年特に図書館が力を入れた事項の一つは資料デジタル化の推進であるという。その結果として、香港科技大学機関リポジトリ、古代中国地図、大学のアーカイブ電子資料、香港科技大学電子論文、図書館展示会と”XML Name Access Control Repository”を含んだデジタルライブラリーは世界中でアクセスが可能であるとのことであった。また、マイクロフィルムは”Landmarks of Science”（500 年の科学的文学をカバー）と、”Goldsmiths'-Kress Library of Economic Literature”という 2 つのより大きなコレクションとなっていること、特別コレクションとして、図書館における貴重で美しいもの、とりわけ古い中国地図、科学史のコレクション、そして台北宮殿博物館からきた絵画やカリグラフの複写物が収容されていること、大学のアーカイブでは、香港科技大学設立時からの出版物や管理文書が大学アーカイブの中にあ

ること、これらの多くはスキャンされ大学のデジタルアーカイブを通して有効活用されているとのことを伺った。

〈所感〉

以上のように、図書館資料と図書館にある様々な施設、コンピュータ室、セミナー＆プレゼンテーション室、グループスタディ室などの十分な活用により、学生自身の学びや先生方からの研究指導を容易にしている。

とくに「ラーニング・コモンズ」では図書館スタッフによるレファレンスサービスと高度な学習支援とが一体となって行われている。そのことが世界でも高い大学ランキングの獲得に繋がっているようである。そして、そのためには、スタッフの絶え間ない努力と創意工夫、施設設備のメンテナンス、資金確保のための学生募集対策などが大切であると理解した。

すべてが斬新なものであり、このような素晴らしい情報を得る機会を頂いたことを感謝している。

参考文献・サイト

・About HKUST　http://www.ust.hk/eng/about/campus.htm　[accessed 2014-2-14]
・About HKUST Mission and Vision http://www.ust.hk/eng/about/mission_vision.htm [accessed 2014-2-14]
・HKUST Facts and History http://www.ust.hk/eng/about/fh_history.htm [accessed 2014-2-14]
・HKUST Strategic Plan 2011-16 http://strategicplan.ust.hk/index.html [accessed 2014-2-14]

(3)　香港城市大学 City University of Hong Kong

〈大学概要〉

香港城市大学は 1984 年創立の 6 学部 1 研究科（ビジネス学部、人文科学学部、科学技術学部、クリエイティブメディア学部、エネルギー環境学部、法学部、周亦卿大学院研究科）を擁する総合大学である。最寄りの九龍駅から徒歩 5 分ほどにある、立地条件の良いキャンパスには、約 2 万人の学部生・大学院生等が学んでいる。世界大学ランキング（QS World University Rankings 2013）においては、世界 104 位、アジア 12 位にランクインしている。また、創立から 50 年を経過していない大学の部においては、世界 4 位にランクインしている。

〈図書館概要〉

大学図書館は 1989 年にキャンパス内の Academic 1 と呼ばれる建物に設置され、大学に多額の寄付をした Sir Run Run Shaw（邵逸夫）の名を冠し、Run Run Shaw Library と名付けられている。大学図書館は独立した建物ではなく、Academic 1 の 3 階フロアを図書館としている。座席数は約 2,430 席あり、1,026,200 冊の図書と 240 万冊以上の電子書籍を所蔵している。また、製本雑誌は 210,000 冊にのぼり、継続購読雑誌は 2,530 タイトルある。増加していく電子ジャーナル、データベースそしてメディア資料の管理も行っている。

〈図書館サービスと設備のリノベーション〉

香港城市大学図書館は、2005 年から 2009 年にかけて、大々的な図書館サービスならびに設備のリノベーションを行っている。これら一連の展開は、インフォーメーションテクノロジーの進歩、並びにインタラクティブ・ラーニングという新しい教授法に対応した図書館サービスを求める利用者の声に、図書館が対応してきた結果の成果物である。そして、これらの活動は「大学の学術活動の中心である図書館は、利用者に豊かで多様な図書館サービスを提供しなければならない」という理念に基づいたものである。

・　2005 年　インフォーメーション・スペースの設置

コンサルタントおよび利用者からの IT 設備の拡充の要望を受け、2005 年にインフォーメーション・スペースを設置。幅広いアプリケーションソフトを備えた約 100 台のパソコンの利用者への提供を開始。

〈インフォメーション・スペース〉

・　2006 年　スタッフスペースの見直し

利用者から閲覧および学習用スペースの拡大の要望を受け、図書館スタッフスペースのレイアウトの見直しを検討。図書館スタッフスペースをフロアの隅へと移動させることに

より、150 席以上の増席を実現。

・　2007 年　ラーニング・コモンズの設置

インフォーメーションテクノロジーの進歩および新しい教授法といった図書館を取り巻く環境の変化から、図書館は情報技術と情報サービスを享受することのできるラーニングセンターでなければならないとの認識に立ち、政府および大学からの支援のもと、準閉架コレクションエリア・ライブラリーラウンジ・レジャーコーナー・オーバル・IT ヘルプデスク・レファレンスデスクから成るラーニング・コモンズを設置。

オーバルとは、その名のとおり卵型にレイアウトされた利用者エリアのことで、このエリアには最新のパソコン設備とレファレンスブックコレクションが備えられている。オーバルの近くには、レファレンスデスクと IT ヘルプデスクを統合したカウンターを設けている。この戦略的なレイアウトにより、利用者は研究に必要な冊子および電子のレファレンス資料を、レファレンススタッフを活用しながら、最大限に利用できるとともに、IT 面でのサポートも即座に受けることができるようになっている。

〈図書館の中心に位置するオーバル〉

・　2008 年－2009 年

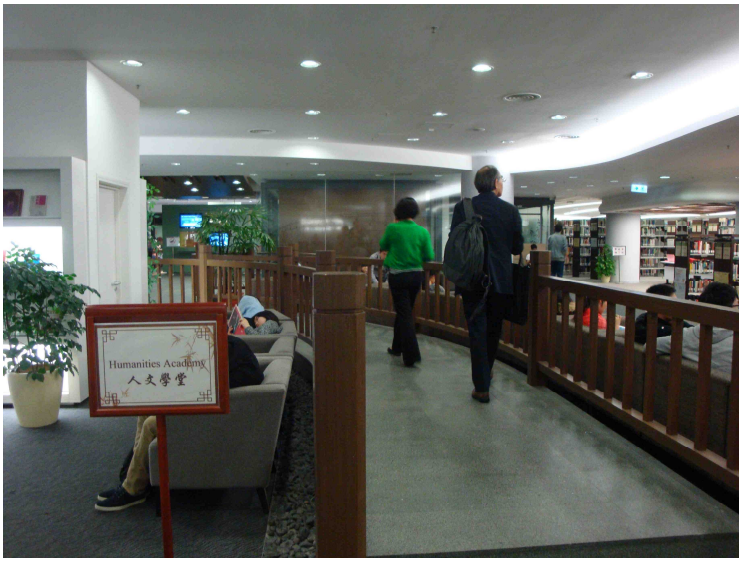
①　サブジェクトベース・コレクションの構築

利用者からの同じ学問分野の図書により容易にアクセスしたいという要望を受け、学問分野毎に特化した利用サービスを提供するために、4 つのコレクション（ビジネス・人文科学・法律・科学技術）のゾーニングを 2008 年、2009 年に行った。４つの学問分野の資料は、かためて配架されている。

②　ヒューマニティーズ・アカデミーの設置

大学教育において、インタラクティブ・ラーニングが重要視されるようになってきたこ

と、ならびに、仲間同士でのディスカッションのためのスペースが必要とされてきたことから、2009 年に、インタラクティブラーニングゾーンとして、ヒューマニティーズ・アカデミーを設置。ヒューマニティーズ・アカデミーには、インタラクティブな参加型学習をより良いものにするために、テクノロジーを備えたグループスタディルームが設置されている。



〈ヒューマニティーズ・アカデミー〉

③　多目的ロビーの設置

学部の枠を超えたコラボレーションを支援するため、2009 年に学際的なコラボレーション活動を支援するための、展示やイベント開催のための多目的ロビーを設置。

④　ミニシアターの設置

大学の教育哲学である「全人格的な発展」を図書館が支援するために、ミニシアターを設置。学生たちが美術、音楽、その他の芸術を鑑賞するための機会を増やすことも目的としている。

〈その他のサービス展開〉

①　Easy Service の展開

・　EasyCheck and EasyReturn

自動貸出機を導入し、図書の貸出・返却をセルフサービスにしている。一般図書の貸出処理の 50%以上が自動貸出機でなされている。準閉架コレクションエリアに配架されているリザーブ図書と、メディアコレクションエリアに配架されている CD および DVD には、IC タグが装備されており、全ての貸出処理が自動貸出機でなされている。

・　EasyPay

香港城市大学図書館では、返却期限を過ぎても貸出図書を返却しない利用者に対して、１日毎に課金するシステムを採用しており、その支払いも IC タグ内蔵の利用者カードで、

利用者が自分の都合の良いときにセルフサービスで支払うことができるようになっている。

② 盗難対策について

サービスおよび施設の刷新により、図書館の利用者が増加することから、セキュリティの強化に取り組んでいる。具体的には、2009 年 12 月時点で館内に 109 個の監視カメラを設置し、その後もレイアウトの見直しにより拡大した利用者エリアをカバーできるよう、更に監視カメラを増設していた。また館内巡視スタッフも増やしていた。

③ OAPS について

The OAPS (Outstanding Academic Papers by Students) project とは、学生の優れた論文を収集し、デジタル化して保存し、香港城市大学の学生の研究成果を永続的に利用されるようにするための、香港城市大学図書館と同大学の各学部との共同プロジェクトである。

OAPS に登録された論文は学内だけではなく、Google Scholar や WorldCat といった世界的に信頼を集める学術文献検索エンジンにて検索されるようになる。これにより学生に国際的な視野を涵養し、学生の研究能力を高め、優秀な若手研究者を育てることを目標としている。

OAPS はアメリカ、中国、日本、韓国、シンガポール、台湾、タイの大学にも参加大学を広げ、日本からは現在、早稲田大学が参加している。

〈所感〉

上述のとおり、香港城市大学図書館は、独立した建物ではなく、Academic 1 という校舎の 3 階フロアがその敷地である。総面積は 11,550 ㎡であり、他の香港の大学に比べると小規模の図書館である。しかしながら、リノベーションされた館内は非常に洗練されていて、利用者支援サービスも非常に充実しており、利用者も非常に熱心に、そして満足して図書館を利用している印象を受けた。先に、リノベーションは利用者の声に対応してきた図書館の活動の成果物であると述べたが、その原動力は「図書館は大学の学術活動の中心である」という理念と、それに基づく徹底した顧客志向の組織力にあると感じた。今回の研修先で訪れた香港の図書館は、どれもみな日本の大学図書館とは比べ物にならないほどの大型図書館である中で、香港城市大学図書館は、その規模においては日本の大学図書館と同規模程度であり、先進的な大学図書館の現実的なモデルケースであると言えよう。また、5 年間という比較的短い期間で、先進的な大学図書館へのリノベーションを達成したことも注目すべきであろう。限定された条件下において、いかに図書館員が熱意を持って創意工夫をこらし、利用者のニーズを満足させるような図書館に発展させていくことができるのかという可能性を、香港城市大学図書館に見ることができたと感じている。

参考文献・サイト

・香港城市大学 http://www.cityu.edu.hk/lib/ [accessed 2014-2-1]
・香港城市大学『16th Library Newsletter』2009, 29p.
・香港城市大学『17th Library Newsletter』2010, 43p.
・OAPS Portal　http://www.oapsportal.org [accessed 2014-2-1]

(4)　香港中文大学　Chinese University of Hong Kong

〈大学概要〉

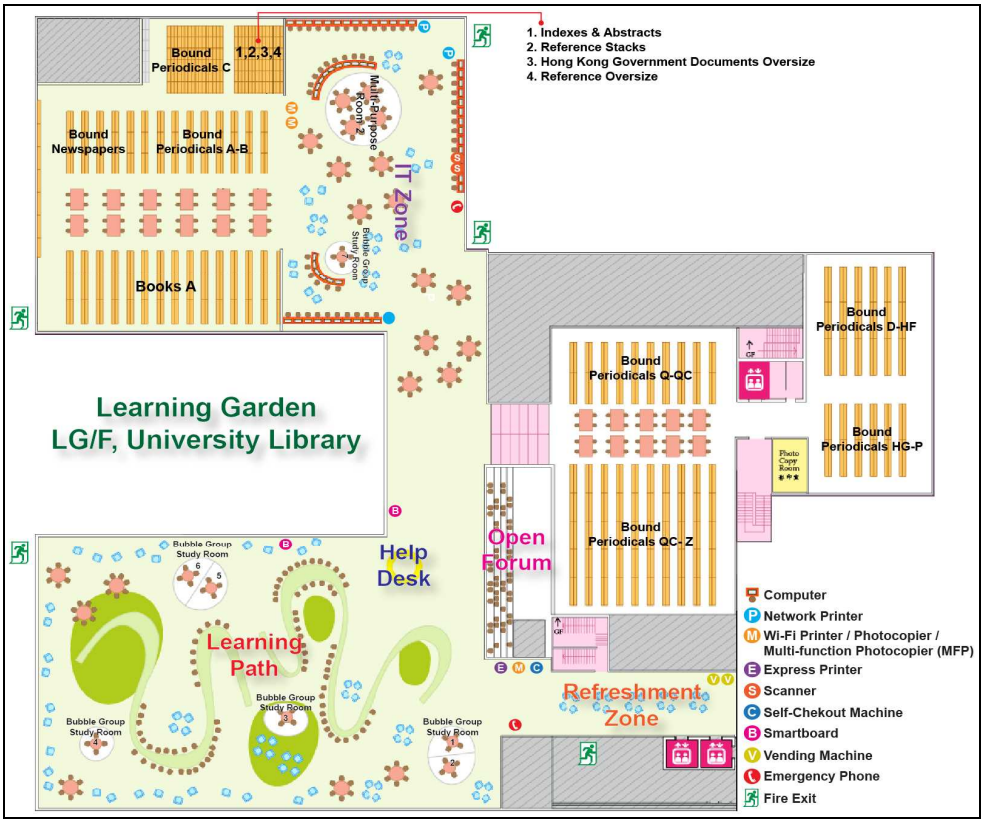
香港中文大学は、137.3 ヘクタールの広大、かつ緑豊かなキャンパスを持つ香港最大規模の大学である。医学院、法学院などの 8 学部を擁し、学部生 15,314 名（うち留学生 1、666 名）と大学院生 3,384(うち留学生 1,493 名）が学ぶ。教員数（TA 含む）は 1,623 名で、4 名のノーベル賞受賞者が名を連ねている。国際交流事業に力を入れており、30 の国と地域に 230 の協定校がある。日本とは 29 の大学と協定を結んでいる。

〈図書館概要〉

大学内には大学図書館（the University Library）を含む計 7 つの図書館があり、1963 年の大学設置と同時に設立された大学図書館機構（ the University Library System ）が大学図書館と他の図書館との調整役を担っている。大学図書館機構全体の所蔵数は、図書 252 万冊、カレント雑誌 9,740 タイトル、データベース 632 タイトル、電子ジャーナル 129,344 タイトル、電子書籍 4,557,516 タイトルである。大学図書館機構全体の座席数は 4,164 席、総パソコン台数は 597 台、総面積は 32,256 ㎡である。通常期の開館時間は月−金が 8:20 から 22:00 まで、土曜日が 8:20 から 19:00 まで、日曜日が 13:00 から 19:00 までである。後述するラーニングガーデンは香港中文大学の構成員に対しては 24 時間開室している。

〈ラーニングガーデン〉

ラーニングガーデンは、大学図書館の Lower Ground Floor（実質的には地下 1 階）に、2012 年 11 月に設置された 24 時間オープンのラーニング・コモンズである。ラーニングガーデンでは、2000 ㎡の敷地を 3 つのゾーン（Collaborative Learning Zone、IT Zone、Refreshment Zone）に分け、学部生の利用に供している。このエリアでは、学部生は、プロジェクトワークをサポートする図書館と IT 技術の専門家と、使い勝手の良い座席、そしてコラボレーション・ラーニングを支援する様々な施設および機材を利用することができる。



① Collaborative Learning Zone

ラーニングガーデンのメインスペースである。学部生のコラボレーション・ラーニングを支援するための工夫を凝らした機器、施設が備えられていた。

・Learning Path

Collaborative Learning Zone に 2 台設置されている、曲りくねった高低差のある細長いテーブルである。自由度が高く、個人学習にも、グループ学習にも使える。

〈Learning Path〉

〈Open Forum での発表の様子〉

・Bubble Group Study Rooms

Bubble Group Study Room は 7-8 人用のグループ学習室である。各部屋にはノートパソコン、液晶モニター、Wi-Fi サービスが提供されている。

〈Bubble Group Study Room 外観〉

〈Bubble Group Study Room の中〉

・Multi-purpose Room

Multi-purpose Room は約 30 人まで収容できる部屋で、教員の授業もしくは学習スペースとして利用される。この部屋には、可動式の椅子とテーブル、パソコンおよび液晶モニターが備えられている。

〈Multi-purpose Room 1〉

〈Multi-purpose Room 2〉

・Smartboard

Smartboard はスクリーンとプロジェクターが一体となった可動式の機器である。このスクリーンには専用のマーカーとイレイサーで直接書き込むことができる。

〈Smartboard 1〉

〈Smartboard 2〉

・Open Forum

Open Forum は 75 人まで収容できる広場である。ここにはイベントを開催するためのプロジェクターとオーディオ設備が備えられている。

〈Open Forum でのイベントの様子〉

〈Open Forum の階段〉

・Whiteboard wall

オープンフォーラムエリアの前に設置されたホワイトボードの壁である。グループディスカッションやコラボレーション・ラーニングを促進する目的で設置されている。

〈Whiteboard wall 1〉

〈Open Forum 前のフリースペース〉

② IT Zone

デスクトップパソコン（windows および mac)、デュアルモニターディスプレイ、スキャナー、ネットワークプリンターが備えられている。

〈IT Zone 1〉

〈IT Zone 2〉

③ Refreshment Zone

軽いスナック菓子や飲み物用の自動販売機、飲食用のテーブルと椅子、テーブルゲーム、娯楽用の雑誌が備えられている。

〈Refreshment Zone 内の自動販売機〉

〈Refreshment Zone 内ボードゲーム〉

〈その他の取組み〉

① 利用者とのコミュニケーション

香港中文大学図書館では、学生や教員等の利用者と定期的にコミュニケーションの機会を持ち、そこで得られた評価を図書館のコレクションおよびサービスの改善にフィードバックしている。

・Library User Group

2001 年設立。メンバーは図書館長、閲覧および教育担当司書、図書館職員（事務局）、学部長により任命された 8 名の教員、6 人の学生代表者より構成される。年に 3 回、

図書館の利用に関する事柄について話合うための会合を開く。

・Faculty Liaison Programme

Faculty Liaison Programme は、図書館職員と学部が協働するためのプログラムで、教員が図書館の発展のために、現在のサービス内容を評価するものである。このプログラムでは、各学部の代表教員と、学部ごとのリエゾン・ライブラリアンが連携することになる。各学部の代表教員とリエゾン・ライブラリアンは、可能な限り、公式もしくは非公式に、会話の場を設ける。これにより、教員とライブラリアンとの間のコミュニケーションが密になり、図書館サービスと図書館コレクションの改善へつながっている。

② 身障者用設備の充実

香港中文大学図書館では、身体に障害を持つ利用者への配慮がなされ、専用の設備もしくはソフトウェアが導入されていた。

・Page Turner

図書のページをめくる機器。

・Telesensory Magnifier

図書の文字を拡大し、ディスプレイに映し出す機器。

・Lunar Plus、Zoom Text

パソコンのディスプレイに表示される内容を拡大するソフトウェア。

・Reading Edge

OCR ソフトと音声出力により構成された欧文用音声読書器。

〈所感〉

今回の研修で私たちが見学した大学図書館（the University Library）は、前もって「この施設は図書館である」と知らずに入館したら、この施設を図書館と思わない人もいるかもしれない、と思うような図書館であった。

私たちが見学したのは大学図書館の 1 階、2 階、地下 1 階部分のみであるが、私の印象に残っているのは、スタイリッシュなデザインの備品、スペースを贅沢に使った展示エリア、自由度が高く、広々としたラーニング・コモンズの 3 点である。その一方で、伝統的な図書館の雰囲気があったのは、2 階の参考閲覧室のみで、その他のエリアでは書架に本が並んでいるという、いわゆる図書館らしい姿はほとんど見当たらなかった、と記憶している。

とはいえ、この大学図書館は 1965 年に建てられた図書館であるので、もともとすべてのフロアは、書架が立ち並ぶ伝統的な図書館のスタイルであったものと思われる。今日の形になったのは、この図書館を改築する際に、香港中文大学図書館の図書館員と、そ

しておそらく利用者（教員および学生）との総意によって、今後の大学図書館が利用者に提供するべき機能を優先順位づけ、戦略的に今日ある図書館の姿をデザインしていった結果によるものだと思われる。

これを自館に置き換えてみると、仮に私の所属する図書館が 4 階建ての伝統的なスタイルの図書館であったとして、利用者がアクセスしやすい 1 階、2 階部分のほとんどすべてをラーニング・コモンズと展示のスペースに改築したということになる。そのように考えると、研修中は他に類を見ないラーニングガーデンというスペースにのみ目を奪われたが、香港中文大学図書館が非常に思い切った施策を計画し、実行したことに改めて感銘を受けた。

参考文献・サイト

・ 音声読書器： 読み上げ機能付き OCR　READING EDGE
http://www.cis.twcu.ac.jp/~k-oda/AccessBlind/OCR/readingedge.html
[accessed 2014-2-1]
・ CUHK Learning Garden http://www.lib.cuhk.edu.hk/learning_garden/lg.html
[accessed 2014-2-1]
・ CUHK “Library Handbook 2013-2014”, p.24
・ Dolphin Lunar Plus Screen Magnifier
http://www.steller-technology.co.uk/dolphin_lunar_plus.php [accessed 2014-2-1]
・ Telesensory http://www.telesensory.com/ [accessed 2014-2-1]
http://www.steller-technology.co.uk/dolphin_lunar_plus.php [accessed 2014-2-1]

(5) 香港中央図書館　Hong Kong Central Library

〈概要〉

「香港公共図書館」（Hong Kong Public Libraries）は香港地区の67の公共図書館と10ルートの移動図書館で成り立っており、香港中央図書館は、この「香港公共図書館」のメイン図書館である。香港中央図書館は2001年創立で、香港島北岸のMTR(地下鉄)の銅鑼灣（Tung Lo Wan）駅、天后（Tin Hau）駅にも近く、また、公共バス、香港トラム（路面電車）が始終行き交う通りに面した場所にある。

〈香港公共図書館組織全体の概要〉

今回の訪問の際、最初に地下1階の活動室（Activity Room）で香港公共図書館の組織全体について概要や、香港公共図書館全体での取り組みや、配布しているチラシ等資料、ホームページ等について説明された。

それによると香港地区全体で67館という多くの場所での公共図書館サービスが提供されている。各館の開館日・休館日は各館で異なっている。頂いた資料によると、（67館の内の一部の情報ではあるが）27館中の17館が休館日無し、4館は月曜、4館が木曜、1館が月・水・木・土・日休館（火・金のみ開館、１館が火・金・日が休館（月・水・木・日開館）であった。開館時間も基本的に（昼間中心ではあるが）各館で異なっていた。なお移動図書館については（同資料の内容では）全て月から土は運行、日・祝のみ休みとなっていた。香港公共図書館の一覧は下記の表の通り。

区	館数	館名
Central and Western District Eastern District （中 西 区）	3	City Hall Public Library （大会堂公共図書館） Shek Tong Tsui Public Library （石塘咀公共図書館） Smithfield Public Library（士美非路公共図書館）
Eastern District （東 区）	6	Chai Wan Public Library （柴湾公共図書館 ） Electric Road Public Library（電氣道公共図書館） North Point Public Library （北角公共図書館） Quarry Bay Public Library（鰂魚涌公共図書館） Siu Sai Wan Public Library（小西湾公共図書館） Yiu Tung Public Library（耀東公共図書館）
Southern District （南 区）	4	Aberdeen Public Library （香港仔公共図書館） Ap Lei Chau Public Library （鴨・洲公共図書館） Pok Fu Lam Public Library （薄扶林公共図書館） Stanley Public Library （赤柱公共図書館）
Wan Chai District （湾 仔 区）	3	Hong Kong Central Library （香港中央図書館） Lockhart Road Public Library（駱克道公共図書館） Wong Nai Chung Public Library（黄泥涌公共図書館）
Kowloon City District	4	Hung Hom Public Library （紅磡公共図書館）

（九龍城区）		Kowloon Public Library （九龍公共図書館） Kowloon City Public Library（九龍城公共図書館） To Kwa Wan Public Library（土瓜湾公共図書館）
Kwun Tong District （觀塘区）	6	Lam Tin Public Library（藍田公共図書館） Lei Yue Mun Public Library（鯉魚門公共図書館） Ngau Tau Kok Public Library（牛頭角公共図書館） Sau Mau Ping Public Library（秀茂坪公共図書館） Shui Wo Street Public Library（瑞和街公共図書館） Shun Lee Estate Public Library（順利佾公共図書館）
Wong Tai Sin District （黄大仙区）	6	Fu Shan Public Library（富山公共図書館） Lok Fu Public Library（樂富公共図書館） Lung Hing Public Library（龍興公共図書館） Ngau Chi Wan Public Library（牛池湾公共図書館） San Po Kong Public Library（新蒲崗公共図書館） Tsz Wan Shan Public Library（慈雲山公共図書館）
Sham Shui Po District （深水□区）	4	Lai Chi Kok Public Library（荔枝角公共図書館） Pak Tin Public Library（白田公共図書館） Po On Road Public Library（保安道公共図書館） Un Chau Street Public Library（元州街公共図書館）
Yau Tsim Mong District （油尖旺区）	4	Fa Yuen Street Public Library（花園街公共図書館） Tai Kok Tsui Public Library（大角咀公共図書館） Tsim Sha Tsui Public Library（油・地公共図書館） Yau Ma Tei Public Library（尖沙咀公共図書館）
Kwai Tsing District （葵青区）	3	North Kwai Chung Public Library（北葵涌公共図書館） South Kwai Chung Public Library（南葵涌公共図書館） Tsing Yi Public Library（青衣公共図書館）
Tuen Mun District （屯門区）	3	Butterfly Estate Public Library（蝴蝶佾公共図書館） Tai Hing Public Library（大興公共図書館） Tuen Mun Public Library（屯門公共図書館）
Tsuen Wan District （荃湾区）	2	Shek Wai Kok Public Library（石圍角公共図書館） Tsuen Wan Public Library（荃湾公共図書館）
North District （北区）	3	Fanling Public Library（粉嶺公共図書館） Sha Tau Kok Public Library（沙頭角公共図書館） Sheung Shui Public Library（上水公共図書館）
Yuen Long District （元朗区）	3	Tin Shui Wai North Public Library（天水圍北公共図書館） Yuen Long Public Library（元朗公共図書館）

		Ping Shan Tin Shui Wai Public Library（屏山天水圍公共図書館）
Sha Tin District （沙田区）	3	Lek Yuen Public Library（瀝源公共図書館） Ma On Shan Public Library（馬鞍山公共図書館） Sha Tin Public Library（沙田公共図書館）
Tai Po District（大埔区）	1	Tai Po Public Library（大埔公共図書館）
Islands District （離島区）	7	Cheung Chau Public Library（長洲公共図書館） Mui Wo Public Library（梅窩公共図書館） North Lamma Public Library（南丫島北段公共図書館） Peng Chau Public Library（坪洲公共図書館） South Lamma Public Library（南丫島南段公共図書館） Tai O Public Library（大澳公共図書館） Tung Chung Public Library（東涌公共図書館）
Sai Kung District （西貢区）	2	Sai Kung Public Library（西貢公共図書館） Tseung Kwan O Public Library（将軍澳公共図書館）
【移動図書館10台】 ホームページ上で、停車地（Mobile Libraries Stops）を、場所・車No.・曜日・停車地・AM/PM毎に停車場所の地図とリンクさせ、運行予定を検索できるようにしている。		

〈香港公共図書館全体でのサービス〉

「香港公共図書館」ホームページ上で以下のように、中国並びに海外英語版の多種多様な電子ブックやデータベースの採用、所蔵検索と連動した数々のWeb上でのサービスが展開されている。また、「英語版」「簡体字」「繁体字」の３とおりの言語表記されているのも、国際都市の香港ならではの特長を感じさせる。

（香港公共図書館HPの一部）

ホームページ上でのサービス名	概要
Booking Service of Multimedia Information System (網上預約服務)	基本的に7日間の本や視聴覚資料などの予約が出来、予約したことをプリントアウトしたりメールで送ったりする。
Reservation of Library Materials via the Internet (網上預約図書館資料服務)	ホームページ上のCatalogue（蔵書目録）検索によって検索された本やCD-ROMなどの資料のとりおき（予約）ができる。
Email Notification Service (電郵通知書服務) ＊メール登録者への通知サービス	1.返却期限日2日前の予告通知 2.返却期限を15日越えた場合の通知 3.資料のとりおき（予約）の通知 4.資料のとりおき（予約）の解除通知
Renewal of Borrowed Library Materials (網上続借図書館資料服務)	登録番号を使って借りている本のページに入り継続したい図書についてチェックを入れることにより手続ができる。
E-Books@HKPL 登録者への電子ブック閲覧サービス	・方正中文電子書(Apabi Chinese eBooks) ・遠景繁體中文電子書(Vista E-Book in Traditional Chinese) ・eBooks on EBSCOhost ・ebrary Academic Complete ・Safari Business Books Online ・Safari Tech Books Online　など閲覧できる。

その他の特長

・「ASK Librarian（伺図書館館長査詢）」という司書への質問メニューがあり、「一般的な問合せ」用と「スポーツ＆フィットネス」用の入力フォームがある。

・「Basic Law」「Creativity and Innovation」「Arts 」「Map」「Business」「Industry」「Hong Kong Literature」「Education Resource」「Web-based Education」「Depository & Special Collections」「Sports and Fitness」「Food and Nutrition Collection」について香港公共図書館の中でも特に専門的に対応できる館の紹介をしている。

・モバイル対応版あり(中文版 と ENGLISH 版のみ)
（流動版図書目録；Mobile Version of Library Catalogue）

・画面の上の方から以下のような順番でリンク付けされている

・Hong Kong Central Library thematic website
(香港中央図書館ホームページへのリンク)

・HKPL YouTube Channel
（香港公共図書館関係の利用案内など含めたユーチューブ）

・Make full use of the "Library Card for Guarantor's Use"

（利用登録する際の保証人規定）
・Self-service Printing
（香港地下鉄の IC カード「オクトパス」を使った図書館での印刷方法）
・Book Drop Service at MTR Interchange Stations
(主要な地下鉄駅に設置されている返却 BOX について)
・Leisure and Cultural Services Department
(香港政府のレジャーと文化に関するページ【康楽及び文化の事務署】)
・GovHK
(香港政府のレクレーションとスポーツに関するページ)
・Government Wi-Fi Programme (GovWiFi)
(香港地区で提供されている無料 Wi-Fi の紹介)
・Central Resources Centre
（香港政府教育局の情報提供ページ）
・Capacity Building Mileage Programme (Chinese Only)
(生涯教育と自立支援を目的とした NPO のページ)
・Labour Department Interactive Employment Service
(香港政府労働局の就職情報等の労働に関する情報提供ページ)
・Organ Donation
(香港政府の臓器移植やドナー提供に関するページ)
・Applications on Smart ID Card
（香港政府による公共図書館、入国手続きなど各種証明に使える「The smart ID card」の紹介）
・UNESCO Archives Portal
(ユネスコ)

ホームページを使った取組み以外にも、「電話續借及帳戸査詢服務（Notes for the Telephone Renewal Service 及び Telephone Renewal and Account Enquiry Services)」という 24 時間電話により電話による貸出継続手続なども行っている。また、「Newsletter 通訊」という広報誌を発行し、香港各地の図書館利用者活動紹介や所蔵資料の詳説、イベントの案内などの広報を行っている。

〈香港中央図書館について〉

訪問にあたり私共は、宿泊先ホテル（香港島香港大学付近）から車を使い、30分ほどで到着した。今回訪問した香港公共図書館は、通りの目前に立つ12階建ての建物である。バスやトラムが行き交う大変交通量の多い通りに面しており、交通の便の良さを感じた。

〈図書館前の通りの風景〉　　〈図書館全景〉

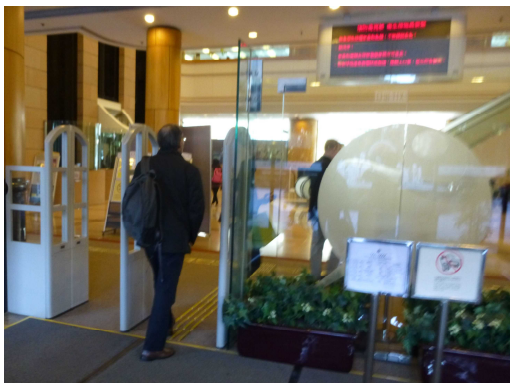
香港中央図書館は67館ある香港公共図書館の中で最大であり、高さ12階建ての建物は、38,000平方メートルの床面積（ホームページ情報）を誇る。
各フロアの概要は以下の通りである。

G/F(地下1階)

活動室（Activity Room）、展示室（Exhibition Gallary）、講演室（Lecture Theater）など利用者が教育活動をするスペースやホールがある。
講演室（演講廳）は、290座席数で、セミナー、会談、プレゼンテーションのための会場として用いられる。

1/F（1階）

入口(Main Entrance)、総合案内的施設(Customer Service Center、Information Service、Internet Express Terminal）、売店（Book & Gift Shop）、カフェテリアなどがある。



〈1Fメインエントランス〉

〈1F入ってすぐの付近の吹き抜け〉

〈1Fカフェテリア前広場〉

2/F（2階）

玩具図書館（Toy Library）、児童活動室（Children's Activity Room）、児童用マルチメディア室（Children's　Multimedia Room）、授乳室（Baby Care Room）など、幼児・児童対象の資料や設備・施設がある。

3/F(3階)

中国書籍(Chinese Books)、英文書籍（English Books）、録音資料（Audio Materials）など一般利用者を対象とした資料を配架している。

4/F（4階）・5/F（5階）

新聞や雑誌など定期刊行物が配架してある。

5/F（5階）

地図図書館(Map Library)、マイクロフォーム（Microform Reading Area）、情報検索室(Computer & Information Center)などがある。

6/F(6階)

青少年閲覧参考図書館（Young Adult Learning & Reference Library。対象は12歳から17歳）、視聴覚資料（Audio-visual Library）、語学学習室（Language Learning Center）、ディスカッションルームなどがある。

〈6F語学学習室入口〉

〈6F語学学習室案内表示〉

7/F（7階）

一般書及び貴重書書庫（Central Book Stack 、 Rare Book Stack）となっている。

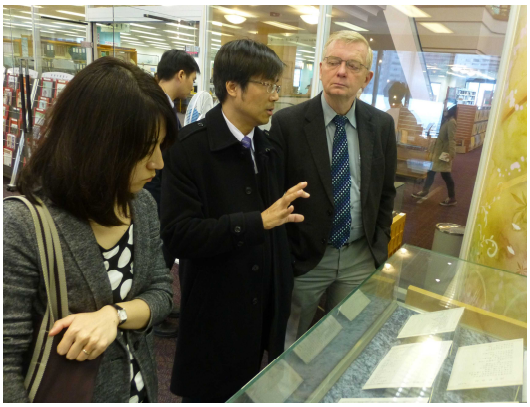
〈7F珍本書庫内部〉

8/F（8階）・9/F（9階）

レファレンスコーナー（参考及資訊查詢服務中心）があり、資料も、「社会科学部(Social Science)」「科技部（Science & Technology）」「人文科学(Humanities)」「商業及び財産（Business & Finance）」「香港資料部(Hong Kong Studies)」「香港文学資料室（Hong Kong Literature Room）」「その他一般参考」の６部門に専門化しておりそれぞれコーナー(Department)を設けている。

更に香港口述歴史特蔵（Hong Kong Oral History Special Collection）、香港文学資料室（Hong Kong Literature Room）、貴重本（珍本閲覧室：Rare Book Reading Room）など香港ならではの資料がある。

〈8F香港文学資料室入口〉



〈8F香港文学資料室内部〉

〈8F珍本資料室入口〉

〈8F珍本資料室内部〉

10/F(10階)

芸術（音楽、絵、書法、デザイン、写真撮影、彫刻、建築、劇場、ダンスと映画など）の中国語と英語のコレクション、定期刊行物、視聴覚・マルチメディア資料、オンライン・データベースや芸術に関連した住宅案内、ポスター、新聞切り抜きなど閲覧でき、一部は著作権処理後デジタル化されている。

〈10F香港音楽家群像系列
:Hong Kong Musicians Series〉

〈10F芸術資源センター内での写真〉

〈所感〉

香港中央図書館に関しては、2001年5月17日開館時に関して述べられているカレントアウェアネスの先行文献があるため参考にさせていただいていた。そこには、「香港中央図書館のスローガンは、『情報空間を拡張し、自学自習の新紀元に邁進する』である。同館は、香港の公共図書館の中心としての機能を果たすとともに、市民が同館の施設を活用して生涯学習の理想を実現できるようにすることを大きな目標としている。開館前日には、香港特区行政長官董建華氏が出席して、開幕式典が挙行された。董長官は、挨拶の中で、同館を世界的レベルに発展させ、香港の教育改革を支援し、香港経済を知識本位のモデルへと変換することを援助するよう要望した」とある。

今回訪問し見聞した中で、そのスローガンである「情報空間の拡張」については、香港公共図書館全体の進展も含め、開館当時に増してWeb技術の進歩と相まって高度に発展していること、開館から12年経った今日でも期待にこたえるべく、図書館スタッフの方々が、政治・経済・文化で常に斬新な情報を世界に発信し続けてきた香港を代表する貴重な所蔵資料を、的確に市民に提供するために従事されていることが感じられた。

今回時間の関係もあり、ネット等でも評判の高い「児童図書館・玩具図書館や移動図書館を含めた他館」までは見ることはできなかったが、様々なネットワーク構築を行い、日々の資料収集から配架、提供、広報、啓蒙活動といった教育普及活動、生涯教育や自立支援、スポーツやレジャー、レクレーションといった市民の福利厚生の向上といった市民の目線に立った教育改革と知識社会改革への取組に積極的に取り組まれている印象を受けた。

今回の訪問にあたり、音楽やアニメといった日本文化に興味関心の深いスタッフの方もおられ始終打ち解けた雰囲気で、また、香港ならではの貴重な資料や普段目にすること無い貴重図書の収蔵庫など非常に丁寧にご説明いただいたことなど、図書館スタッフの皆様に多大な感謝を申し上げたいと思う。

〈香港中央図書館スタッフとの集合写真〉

参考文献・サイト

・鎌田文彦「香港中央図書館の開館」カレントアウェアネス　No.266、CA1427、2001
http://current.ndl.go.jp/ca1427　[accessed 2014-2-25]

・Hong Kong Public Libraries Mobile Libraries Stops (New Territories Region)
http://www.hkpl.gov.hk/english/locat_hour/locat_hour_ll/locat_hour_ll_ntr/locat_hour_ll_ntr_mobile.html　[accessed 2014-2-25]

IV.　まとめ

1.　おわりに

今回の海外集合研修で最も印象に残ったことは何か、と問われれば、香港のライブラリアンの真摯さである、と答えたいと思う。現地で見た各機関のデジタルコレクション、ラーニング・コモンズは、いずれも素晴らしいものであった。そして、そこに至るまでの経緯には必ず、より良いサービスを提供するための、ライブラリアンの粘り強い試行錯誤があった。例えば、ある大学図書館のラーニング・コモンズは、パイロット版のコモンズから始まり、ライブラリアンによる利用者満足度調査、学生・教員との対話、更には海外視察を経て、６年の歳月をかけて私たちが海外集合研修で見た今日のラーニング・コモンズの姿へと成長を遂げていた。そこには、ただ効率のみを求めて業務を進めていくのではなく、より良いサービスの向上を求めて真摯に業務に取り組み、粘り強くＰＤＣＡサイクルを回し続けたライブラリアンの存在があった。

また、香港は大学図書館ネットワークにおいて先進的である。日本の大学図書館も抱える、予算の削減、書庫の狭隘化等の課題について、大学図書館間での協力体制による課題解決の取組みが本格的になされていた。香港において大学図書館間の協力体制が活発であるのは、各大学が相互に地理的に近く、また、すべての大学が大学補助金委員会(UGC)の資金によって運営されているから、という香港の大学図書館特有の特殊な事情に拠るものであると思われるが、その取組み内容は先進的事例として参考とするに値するだろう。

香港は、大学図書館および公共図書館の先進性において、アメリカの先進的な図書館に比しても見劣りするところがなく、また、各機関が相互に地理的に近いため研修に適しており、さらには地理的にも日本に比較的近いことから、次年度以降の海外集合研修の候補地として有力であるのはもちろんのこと、日本の図書館がその取組みを学ぶべき対象とする地域であると言えるだろう。

2.　謝辞

今回の研修では、香港大学図書館の方々に終始厚く遇していただいた。また、各訪問機関ご担当者の方々にも丁重な心遣いをいただいた。心から感謝の意を表したい。

最後に私立大学図書館協会をはじめ、終始ご同行いただき香港はじめ中国の様々な文化や言語について教えていただいた関西大学図書館長内田慶市先生、そして、国際図書館協力委員会事務局関係者の方々に感謝申し上げるとともに、今後の当研修が実り多きものになることを祈願して、報告を終わる。